



信 抱





哀 矜





哀 矜



325-82

# 他方信仰論目次

## 向五門

- 一 宗教なき日本國民……………七頁
- 二 宗教なき國民の醜態……………一四頁
- 三 人生と宗教……………三一頁
- 四 宗教學者に對する誤解……………三六頁
- 五 宗教家の誤解……………四四頁
- 六 觀念的解脱と實在的解脱……………五九頁
- 七 私の信仰の變遷……………六七頁
- 八 私の懺悔……………七七頁
- 九 私の歡喜……………七七頁

明治  
 頁 42 8 26  
 丙 亥



一〇 私の告白……………	八三頁
一一 他力信仰の獲得……………	八九頁
一二 他力信仰者の自信……………	一〇二頁
一三 他力信仰者の感謝……………	一〇五頁
一四 親鸞聖人の教示……………	一一〇頁
一五 如來救濟の計畫……………	一一七頁
一六 逆如上人の信仰……………	一二八頁
一七 信仰と智情意……………	一四〇頁
一八 信仰の本質と其鍛錬……………	一五二頁
一九 絶對的謙讓と他力信仰……………	一六二頁
二〇 活動力の源泉と他力信仰……………	一六八頁
二一 哲學倫理藝術と他力信仰……………	一七七頁

二二 他力信仰成立に對する教權と直覺……………	一九四頁
二三 信仰上に於ける正統と異端……………	二〇四頁

向 下 門

一 本寺の天職と教學問題……………	二一三頁
二 宗門の維新信仰の復活……………	二三四頁
三 本化宗學研究會……………	二三五頁
四 拆伏と攝取 <small>(日蓮宗徒に寄す)</small> ……………	二四六頁
五 傳道樂……………	二五三頁
六 夏期講習會に對する希望……………	二五七頁
七 夏期傳導に對する希望……………	二六二頁
八 殿堂問題……………	二七〇頁



九 佛教界に於ける『天路歷程』の著作を望む……………二七五頁

一〇 宗教を求むる者の態度……………二七九頁

附 録

一 他力教に於ける疑惑を論ず……………二八九頁

二 親鸞聖人の本願觀……………三〇九頁

三 他力本願の先天的及實在的證明……………三三三頁

四 疑惑意識論……………三五八頁

他力信仰論

今井昇道



宗教なき日本國民

世界宗教の統計表に依れば、日本五千萬の國民は、率ね佛教信徒五億の中に數へらる。彼等も時に依り、折に觸れては、自ら佛教信徒なり、佛陀の德音に隨喜するものなりと稱す。特に近時選舉競争の際の如きは、少しく佛教隆盛の土地に於て打ちて出でんとする代議士の候補者は、陣頭必佛教信徒の旗を翻し、吾こそ佛教信者なり、

一 宗教なき日本國民



擁護者なりと宣言す。而も果して此等の代議士、及五千餘萬の國民に、まこと忠實なる佛教の信仰ありや。

聞く泰西の耶蘇教國民は、必朝夕二時の祈禱に、若子の時を費す。彼等は日曜に於て、必公會の祈禱會に列すると。特に彼等は、其一日の最も神聖なる時を以て、聖書の熟讀と神との交通に充つると云ふ。那の有名なるゴルドン將軍は、其スーダンにありし時、毎朝天幕の前に札を掲げ、一時間は何人も此中に入るべからずと記し、以て聖書の靈性的研究に充てしど。彼は又奈何に非常の大進撃を爲すに當ても、一日も之を廢せし事なしと云く。又合衆國大統領ジョン、クインシー、アダムスも、常に毎朝一時間以上の時を、聖書の默讀に費せりと。而して其日記に記して云ふ「余を以て見れば、是れ一日を迎ふる最も適當の方法なり」と。又那の盛名あるラスキン、

曾て牛津大學生に演説して曰、「諸君生涯の間、毎朝第一の事業として、必聖書を読み、其部分を明了に領得し、其領得したる所を奉戴して違はざるを一日の業とせよ」と。彼等の何人も第一に學び、第一に手に入るは、聖書とハンヤンの天路歷程なりと。勿論彼等朝夕の祈禱、必しも眞摯なるにあらずして、單に習慣と偽善に止まるものもあらん。安息日の公開祈禱は、單に六日間の氣保養として、公園若くは劇場に入ると同一の感を有するものもあらん。聖書や天路歷程を求むる、單に一般の習慣に依るものもあらん。又毎朝一時間の聖書研究、或ものは一種の虚偽に流るゝものもあらん。されど彼等の全體は決して此の如きものに非ずして、政治家も、軍人も、教育家も、學者も、藝人も、労働家も皆信仰を以て人生の第一義とし、忠實に敬虔に、僧侶の教示を聞き、聖書の研究につとめ、人間社會



に自己の事業を擴め、人格を高むると共に、神の前に又其事業と人格を高むるを怠らず。

翻て見よ、五億の佛教信徒中に計算せらるゝ日本國民の多くを。

歐米に遊んで貴下の信仰はど、問はれて、初めて佛教信徒と自稱せる國民。選舉競走の利益上、初めて佛教の信仰を云々する國民の多くを。彼等は虚言にも朝夕の禮拜を試むるものあるか。彼等は義理にも寺院へ參詣する事あるか。習慣にも偽善にも一卷の佛典を熟讀するものあるか。中等以下の國民、教育少き國民、田舎に生活する國民中には、眞摯に忠實に、佛陀の光明につゝまれ、其經典を熟讀しつゝあるものもあらん。されど少しく教育ある人、智識ある人、名譽ある人、苟も小學校に教鞭を振ふに至り、村役場に書記となるに至れば、最早眼中宗教なし。信仰なし。まして堂々たる大政治家、

大教育家、大學者、大工業家、商業家、軍人に於てをや。

勿論我日本國民は、統一せる信仰をきく能はざらん。一方に念佛成佛を主張すれば、他方には念佛無間と叫び。一面に戒律これ佛教の中心と鼓吹すれば、他面にはこれ形骸的佛教と貶斥す。又我日本國民は、那の耶蘇國民のバイブルの如き、簡易にして靈に満ち、趣味津々として而も普遍的なる佛陀の典籍を有せざるなり。これ宗教傳播の上に、信念修養の上に、恐るべき障碍たるや疑なし。此點に於て日本國民は、大に情狀の酌量せらるべき權利を有せん。されど吾等は單に此等の事情のみを以て、國民全體の不信仰を、寛容するが如き、さる海濶なる大度量は持たざるなり。

世に無信仰なる國民ありとせば、日本は確に其國民なり、宗教なき國民は大國民の資格なく、大國民なきものは滅亡に趨く國民なり。



とせば、日本國民は確に大國民の資格なく、又滅亡に趣くの國民なり。

## 二 宗教なき國民の醜態

(教科書事件に就て)

收賄は天下の最も醜陋なる事なり。教育家は天下の最も神聖なる一部に數へらる。最も神聖なる一部たる教育家、今や最も醜陋なる收賄の爲に踵を續きて獄に繋かれ、又繋がれんとす。東洋の新進國として世界に紹介され、君子國として自ら任ずるもの、世界に對して果して何の面目がある。

若日本國民にして、茲に一大公憤を起し、之に對する根本的の處置を爲すに非んば、日本は全く道徳上の知覺を失ひたるものにして、此の如き國民は、遂に全く世界の地圖面より其存在を失はざるべからず。これ由々しき大事なり。一葉落ちて尙天下の秋を知る。まし



て萬木枯凋秋氣蕭條たるに於てをや。

翻て思ふ、我日本帝國の奈何なる人が、果して自ら大公憤を起し、此腐敗せる教育家を處分し、此が根本的刷新を施し得るの資格あるやを。吾等は猥に我等の同胞に向ふて侮辱を加ふる事を好まず。されど吾等の見る所に依れば、我五千萬の國民中に於て、眞に此の如き資格を有するものは、甚鮮少なるを云ふの不幸を忍ばざるべからざるなり。

吾等は、我國民の全體が、他より苞苴を受けたりとは云はず。位置の便宜を利用して、私利を逞ふせりとは云はず。されど我國民にして、若かゝる教育家の位置に立ち、境遇に置かれたりとせよ。果してかゝる失態に陥らざるもの能幾人かある。よし幸にして之を實地に演ぜずとするも、其精神の裏面に於て、衝潮し來る制し難き汚

穢の劣情はなきか。外見より見れば、此を精神の中に止むるを實地に演ずるとは千里の差異あらんも、若根底より之を論ずれば眞に一髮の徑程に過ぎず。

思ふに這般の收賄事件は、決して偶然の出來事に非ずして、實に維新以來、我民心に侵染せる、唯物主義、現世主義、黄金萬能主義の癩毒が、漸く其弱き部分にはれ出せるのみ。否はれ出せるを認めたるものにして、其實、惡臭鼻を突くの濃汁は、見よ其病體の各方面より滴たゝりつゝあるを。

由來、吾等は自己中心主義なり。喜怒哀樂愛憎違順、皆自己を中心として發作す。これ吾等が根本的性格なり。而も外に之に應ずる唯物、唯利、黄金萬能の恰好ある主義あり。内、外を招き外、内を誘ひ、兩々相待ちて我國民の性格を形くる。かゝる根本的性格は、



法律の命令に依りて、暫之を外部に顯はさる事を得べし。名譽の威嚇に依りて、暫之を内部に潜める事を得ん。社會は有機的關係を保ち、利他畢竟自利を離れざる事を知るに依りて、より長く之を公衆の前に暴露せざるを得ん。されど法律の命令に聽くも、名譽の威嚇に恐るゝも、有機的關係に對する智識に隨ふも、其利欲の根本動機は、畢竟自利己を離るゝものにあらず、水は水源より高かる能はず、利己を動機とせる制欲は、決して眞個の道德に入る能はずして、若機會——名譽に害なく、法律に觸れず、體面を破らざるが如き——の乘すべきあらば、最早法律も名譽も、此等の人々に向ふては、些の功力なく縱横無碍に其暴力を逞ふせずんば止まず、我等は信ず、我等は此陋劣醜穢ある我等が劣情を、根本より之を除去し去り得るとは云はず、されど法律と道德とが指命する所の法則に對して、公

衆の前と閑居の時とを云はず。日中と閑夜とを問はず。能之を守らしむるものは、倫理か教育か、非ず。唯宗教の信仰に限るものなるを。

思ふに、人類ほど私利にさどぐ、劣情に強くして、善事德行に向ふて怯懦なるはあらず。幸にして限なき宗教の大天地に入り、靈的光明に恵まれ、無量の祝福を獲得せるものにして、尙且陋劣の心情に且暮泣かざるべからず。ましてや永遠の生活を知らず、限なき宗教の大天地を知らずして、五十年を以て人類の生命と考へ、地球を以て終局の世界と考へ、唯物主義、唯利主義、黄金萬能主義に生活するものが、賄賂苞苴の中に誘惑せらるゝは、固より當然と云はざるべからず。

吾等は謹みて我日本國民に望む。卿等眞に教科書事件に驚き、彼



等收賄者を憎悪するの情あらば、先仔細に卿等が心中を吟味せよ。己れ汚れつゝ、猥に他の汚れを云ふは云ふもの尙汚らはしければなり。卿等此教育界の状態より、更に社會全般の腐敗墮落に目覺め、日本國家の爲、世界人類の爲にかゝる惡弊を一掃せんと思はば、先卿等自己の精神より之を改造せよ。己れ直からずして人を直からしめんとするは、そは彌直からざる事なればなり。而して卿等若真に自心を改造し、根底より直からしめんと欲はば、卿等は唯それ宗教の大地に行け。卿等は既に倫理學の講釋に飽かん、教育の功力なきを知りつらん、然らば今卿等を導いて、懺悔慚愧てふ根底ある道德に導くものは、宗教の外に他に非るなり。されど宗教は、必しも僧侶の中に在らず、牧師の中に在らず、寧ろ卿等が精神の奥底に潜在して、常に來りて其門戸を開かん事を待ち望みつゝあり、大靈は心靈

の中心にありて切に卿等を招喚しつゝあり。

眞乎、日本將來の運命を憂ふる諸君、教育界一掃を以て自ら任ずる諸君、願くば先づ此精神の奥底を叩いて、宗教の大天地に入り、招喚の聲に答へて、先づ汝自らを改造せよ。さらば又、無慚無愧の此身にて、まことの心はなけれども、彌陀廻向の法あれば、功德は十方に滿ち給ふ。道はこれ天下の公道自ら憐あり。眞理はこれ宇宙の眞理、必ず感應あり。以て教育界を改造すべく、以て國家を既倒に救ふべし諸君唯此聲にきけ。



### 三 人生と宗教

人生奈何？これ人生第一の疑問にして、又最終の疑問なり。人類地上に生れし以來の大問題にして又あらん限りの問題なり。國家、社會、家庭、個人、の價值及生物學上、人類學上の優劣高下の存する所以は、唯此問題の解決奈何に存す。否宇宙一切事物の價值は、一に此疑問の解決様式奈何に存す。

人生は苦なりとの釋尊の人生觀は千古動かす能はず。之を個人の上に見よ、理想と現實の衝突、希望と結果の反對、自他利害の衝突、精神肉體の撞着、善我と惡我の戦闘。噫奈何に人生は禍なる哉。理想は天にかけるに反し、現實は地を這ふて居る。精神は向上の空に

向ふに、肉體は墮落の淵を望む。善我は大道の實踐を希ひ、惡我は一時の面目を保たんとす。而も見よ自利と利他の衝突や吾勝つか彼負くるか、吾死すか彼活くるか、殆兩者其一を選ばざるを得ざる場合あるに非ずや。否眞摯に考察すれば、これ人生の通態なり。畢竟人生は胸倉の掴み合ひなり。ピストルの向け合ひなり。奈何なればかく人生は矛盾多きぞや。

更に進んで家庭——世の青年男女が、甘き若くは温かきと云ふもの、後景として、常に渴仰焦慮しつゝある。詩人は地上の天國と云ひ、沙漠のオアシスとして歌ひつゝある其家庭は！パンを求めて石か、エロスを望んでタイマンか。見よ倫理道德の制裁に依りて無理抑へに抑へて置けばこそ。兄弟牆にせめげども、外其侮を防げばこそ、まことに天下泰平の如からんも、若其内幕に入り、其裏口より



窺はんか、實に濁浪滔々たり、闇雲慘憺たり。嫉妬猜忌、冷酷殘忍、憂悶疾病は至る所に充滿するに非ずや。廣間や玄關は尙空氣の流通も可ならん、而も奥の一室は常に陰氣に濕り勝ちに非るか。

國家——家庭の集合として誇る所の國家も。其成員たる家庭にして然り。奈何で眞乎の平和あらん、調節あらん、まして個人を成員とする國家をや。法律、名譽の制裁に依りて彌縫せられつゝある國家、否今尙權力即權利にて左右せられつゝある社會に、什麼して眞乎の樂地あらん、泰平あらん。戦闘なからん、叫喚なからん、煩悶なからん、憤怒なからん、銅臭なからん、賈節なからん。冷酷なからん、欺慝なからん。見よ大にしては國家と國家の戦闘競争、小にしては個人と個人の喧嘩殺傷、殆間斷あらざるに非ずや。其少しく平和に見ゆるものは、相互に利益の一致せるか、若くは利害の直接

關せざる時か、然らずんば兩者力の度を異にし、弱者強者の犠牲を甘んずる時かに外ならず、されど利益は常に一致するものに非ず、利害は常に間接たる能はず、弱者常に強者の暴力に甘んずる能はず。隨て外相は常に血眼になりて八方に眼をくはらざるを得ず。妻君又銅眼以て一家の大勢を觀察せざるべからず。

一應觀察すれば社會國家、家庭個人は苦と樂、戦争と平和、衝突と調和との連続に似たりと雖、其真相を觀すれば唯これ武裝的平和、根底なき和樂、衝突を基底とせる調和にして、實は戦闘、衝突、苦悶の連続のみ。

人生は奈何なればかく戦闘の連続なるか、衝突の繼列なるか。これ人生の大なる迷謬の上に立つ所以ならずや。即利己若くは我が一切の根底を爲す所以ならずや。家庭も、法律も、國家も、道德も、



畢慮利己の一變形に外ならざるが爲ならずや。要するに社會は他の幸福を犠牲にして始めて得べき幸福追究者の集合なり。名譽位置權勢財產愛欲榮華は常に他に幸福を犠牲にして初めて得らるべきものならずや。而も世の求むる所は實に此ならずや。自然も樂しく、詩歌も趣味あり。慈善も樂しく、教育も面白からん。而も名譽權勢位置財產愛欲榮華少くとも純粹の名譽權勢、一口に我と云ふものと獨立に此等の自然教育詩歌慈善に興味あり趣味ありや否や。よしこれありとするも之を名譽權威位置財產愛欲榮華其物の快樂に比して果して何れぞや。本能の満足に比して果して何れぞや。

吾等は本能の満足を求め、名利の充足に渴す。而も本能や名利や世界人類の等しく求むる所なり。需要者は限なく、欲求は無限なるが、供給に制限あり、程度に又局限あり。かゝる矛盾の上にある人

生、いかで戰闘なかるべき、衝突なかるべき。噫人は人と戦ふべく世に生れたるか。

されど吾等若無限の生命を有し、常に健全なる肉體を有すとせよ。よし需要者は多く、供給物少きも、尙且此を限なき時間の中に満たさるゝを得ん。されど不思議、誰か運命めたるか、人生殆五十に限られ、剩へ老少定めなきに非ずや。病も生活の一状態と云へば何でもなき様なれど、其苦痛はなかく口先で云ふ様なものにも非ず。而も又何時でも來るを奈何。

よし健全息才に進むとするも、誰か百年の形體を保つべきや。人と戦ひ世と戦ひ泣いて怨んで、溜息ついて、斬りつ斬られつ血みどろになりて、而も最後が、じみくと冷たい、ひやくかな死、黒闇々一度行いて再歸る能はざる死。今世紀の歴史を一躍して、直に來



世紀の舞臺に飛べ。トルストイ何處にある。東郷大將何所にある。墳墓若蒸し骨片僅に白きのみ。思ふて茲に至れば、ナポレオンも泣かざるを得ない。ヒスマークも悶へざるを得ない。されど迷執の骨髓に入れる我等、進んで人生の興趣を解さんとせず、死を一切の終局と思ひ、反て窮鼠の如く人生に噛みつき來り、負傷猪の如く社會に突進し來る。まことや人生は窮鼠の噛み合ひなり、負傷猪の突き合なり、權力即權利は此動物界唯一の法則なり。法律や道徳は弱者の制裁のみ。優勝劣敗弱肉強食、勝ては即ち官軍のみ、豈他あらんや。

よし社會は一個の戰場なりとするも、競走場なりとするも、人其出發點に於て同一の體力、腦力財産位置を有すとせば、事の成功失敗は全く自己の責任なるべし。而も事實は然らずして、生れながら

に貧富貴賤あり。賢愚強弱あり。而も失敗は失敗破滅は破滅、噫此怨み誰にか歸せん。社會か父母か。云ふ勿れ社會も此怨みあり、祖先も此怨みになくもの。よし罪社會にあり、祖先にありとするも、運命は唯吾一人受けざるべからざるに非ずや。誰か吾を救ふものぞ、誰か吾を助くるものぞ。父母か、非ず、兄弟か、非ず、朋友か、あらず、仁者か、非ず、彼が吾を助くるは吾に救はるべき根據あるに由るのみ。運命の存する間のみ。我一代の運命、我生命の活殺誰か之を左右するものぞ。

奇なる哉人生、彼等は負傷猪の如く人と戦ひ、世と競ひ、或は起き、或は倒れ、時に悶々、時に笑み、時劫の潮流に浮びつゝ、冥々たる死の淵に赴くものに非ずや。更に見よ、人は大なる運命の洪水に流されて、前者後者を助くる能はず、左者右者を導く能はず。父



は子を悲しみ、妻は夫を嘆きつゝ、時に思はぬ人と結び、時に離れ難き愛情を裂かれ、もがきつゝ死に趣きつゝあるに非ずや。畢竟人生は運命の大洪水中にありて、争ひ競ひ泣き悶て、遂に死の淵に趣くものと云ふべきか。

要するに吾等人生苦痛の原因として三個の法則を見出せり。一は主我主義を根底とする迷妄の人生觀。二は有限界に存する無常變轉の法則。三は人爲の奈何ともすべからざる特殊の運命を有する事これなり。而も此三個の法則、互に經緯を爲し茲に個人の運命を織り、社會の紛擾を描き。人生の悲劇を寫す。此法則の支配を離れ、此羈絆を脱せざる限りは、人生決して眞乎の道德に入るべからざるなり。第一主我主義を根底とする迷妄の人生觀は、吾人の生れながらに具有する所にして、即ち人は生れながらに名譽權勢位置財産愛欲健

康等の限あるべき事物に向ふて、限なき要求を有し。限ある運命をたもちながら、限なき自我擴大、自我發展の衝動を有し。時に理想と現實、肉體と精神、道念と妄情との奮闘となり。時に兄弟、朋友、夫婦、主従間の利害の衝突となり、憎悪となり、憤怒となり、嫉妬となり、猜忌となり。時に賈節となり收賄となり、冷酷となり、怯懦となり。法律も倫理も教育も制裁も、殆奈何ともすべからざるに至らしむる。此撞着せる人生、矛盾せる人生、必戦はざるべからざる人生は、果して何に基因するか。換言すれば禍惡の避くべからざる人生は果して何に基因するか。

又第二の無常變轉の法則即宇宙一切の事物は刹那に生滅し、瞬時に明滅し、一として常住不變なる能はず、かゝる萬物の運命は果して何に基因するか。特に無限の生命を要求する吾人々類を此は又何



事ぞや。或は母胎の中に殺し。三五の蕾に奪ひ。甚しきは意氣天を突き氣宇一世を呑まんとする有爲の青年を、あわれ一朝の嵐に泥土に踏みにしらんとす。噫何等の無情何等の冷酷。よく健全に生活したりとするも、誰か百年の形體を保つべきや。たとひ五十年の生命よし延はす能はずとするも何が故に、無量壽を希望する欲求を吾等に除かざるか。一面に生命無限の欲求を與へ、一面に五十年の否出る息は入るを待たぬ果敢なき生命を與ふるとは。噫かゝる矛盾の運命は果して誰の與ふる所か。

特に第三の運命の法則の如き、吾等殆怪怖にたねざるあり。顔回の短命、盜跖の長壽は云ふも更なり。生れながらにして貧富貴賤あり、賢愚強弱あり、大小長短あり、善惡美醜あり。顯貴富豪の子は愚にして而も賢く。貧賤微弱の子は賢にして而も愚者たり。輕薄の

子肥馬に鞭ちて大道を活歩するに、眞摯の貧人工場の中に殆天日をも見ず。憎まれ者世に憚かる時に當りて、惜まるゝ者茶毘の煙となる。噫これ果して何故ぞや。

世は廣く人は多し。家に父母兄弟あり、外に朋友親戚あり。吾飢ゆれば彼食はせ、我凍ゆれば彼覆ふ。人生至る所知己あり、世界至る所衣食あるが如し。而も見よ、眞乎吾を左右するは唯我運命のみならずや。吾に食ふべき運命ある間人養はん、吾着るべき約束ある間人纏はん。吾敬はるべき價值ある間は吾敬はれん。吾長らふべき生命ある間は吾長らへん。吾健康たるべき間は吾病まざらん。されど吾一たび食ふべき、着るべき、敬はるべき、長らふべき、健康なるべき運命盡きるとせんか、誰か之を左右するもの、誰か之を動かすものぞ。浪子の略血に胸冷やす中將、我瓦我の運命に同情する讀



者彼に對して果して何等の助力を爲し得るか。思ふて茲に至れば。人生は曠野の如く、世界は沙漠の如し。唯吾一人我運命を負ふて孤影悽然たるのみ。

社會より見れば、其所に政府あり。縣廳あり、會社あり。銀行あり。市場あり、工場あり、貧富あり、貴賤あり。歴史より見れば、國家の盛衰興亡あり、文運の發達進歩あり。哲學史あり、藝術史あり、人種あり。文野あり。而も唯これ個人が特殊の運命を擔ふと努力奮闘の跡のみ、歡樂苦痛の迹のみ、ソクラテスも、カントも、ルイテも孔子も、唯彼が爲さるべからざる特殊の運命に依りて、彼の如く憎まれ、愛せられ、反對され、敬仰され、生活し、衣食し、而して棺を蓋へるのみ。

人は特殊の運命を負ふて此世に生れたり。而も此運命は天のユビ

テルも左右する能はず、地のヘルキユレスも動かす能はず。且又人は共通に迷妄の人生觀を有し、共通に無常轉變法則に支配され限なき戰闘を以て死に趣きつゝあるものなり。噫此運命の配布者、迷妄の人生觀の分布者、無常轉變の法則の指揮者、噫これ何者ぞや。

吾等は之を神の所作と考ふる能はず、これ神の觀念と一致すべからざる動作なればなり。吾等はこれを所謂天命と考ふる能はず、これ人生を無意義となし、天然社會の悲劇を偶然の結果となし、吾等をして運命の下に絶望的叫聲を擧げしむればなり。吾等はこれをアダムエプの罪の結果と考ふる能はず、吾等他の罪惡に依りて自ら其不幸を受くる事の謂あるを考ふる能はざればなり。

茲に至りて吾等は、釋尊の四諦三道十二因縁の教理を信せざるを得ず。自因自果の法規を仰がざるを得ず。曰現世は苦なり。此原因



即○苦○果○を○引○く○へ○き○集○諦○と○は○何○ぞ○や○、即○惑○な○り○、業○な○り○。惑○と○は○何○ぞ○や○、無○明○な○り○、宇○宙○の○真○理○を○證○ら○ざ○る○事○こ○れ○な○り○。業○と○は○何○ぞ○や○、此○無○明○よ○り○生○ず○る○各○自○の○所○作○な○り○、行○動○な○り○。此○無○明○と○業○と○に○依○り○て○、吾○等○今○日○の○人○生○を○引○く○。迷○妄○の○人○生○觀○も○無○明○の○所○生○な○り○。無○常○變○轉○の○世○界○も○其○所○生○な○り○。吾○等○が○特○殊○の○運○命○も○吾○等○が○行○動○の○所○産○な○り○。現○世○の○運○命○は○過○去○世○の○原○因○に○よ○り○。未○來○の○運○命○は○現○世○の○原○因○に○よ○る○。噫○微○賤○の○子○他○を○怨○む○勿○れ○、こ○れ○汝○が○過○去○の○報○償○の○み○。噫○短○命○の○才○人○天○を○怒○る○勿○れ○、こ○れ○汝○が○宿○世○の○結○果○の○み○。揚○々○と○し○て○輕○馬○に○鞭○つ○の○才○子○、汝○の○今○日○は○過○去○世○の○結○果○、さ○れ○と○今○日○の○行○爲○は○又○來○世○の○運○命○た○る○ぞ○や○。堂○々○た○る○政○治○家○、赫○々○た○る○成○功○軍○人○、汝○の○成○功○は○ま○こ○と○に○羨○む○べ○し○、さ○れ○と○今○生○の○行○爲○又○來○世○に○報○ふ○を○忘○るゝな○。善○惡○因○果○の○大○法○嚴○と○し○て○世○界○を○照○鑑○し○、汝○が○一○切○の○行○動○を○照○ら○し○て○應

報過らす。善人善を爲して明より明に入り、樂より樂に入り。惡人惡を爲して、冥より冥に入り苦痛より苦痛に入る。

吾等因果の大法によりて、初めて迷妄の人生觀を有する所以を見出せり。無常變轉の運命ある所以を見出せり。各人特殊の運命ある所以を見出せり。吾等は善惡因果の大法のもとに、無明と業との結果として、此憐れなる人生、苦しき人生、短き人生、撞着せる人生、戦はざるべからざる人生を感應せり。今にして吾等何等かの計畫によりて此人生を脱却し、此迷妄を脱離するの道を講せずんば、吾等は永遠に生死の大海によりて、苦痛の連続を反覆せざるべからず。迷より迷に入り、叫喚より叫喚に入り、戦闘より戦闘に入らざるべからず。

噫此迷妄の人生を脱却する道なきか。又迷妄の人生が果して人生



のオールなるか。人生の真相なるか。將又迷妄は常に迷妄にして、眞實に對して何等の旨趣なきか。こゝ眞摯の士の猛省一番すべき所

#### 四 宗教學者に對する誤解

宗教は宗教意識の設定にして、人類の精神的産物なりとは現代一般の宗教學者の唱道する所なり。されど若、宗教意識には根據あるも、其設定せられたるものは、永遠の根底なき、客觀的の價值なきものならば、宗教は、最早一個の、精神的娛樂、精神的安慰法となる事さへ能はざるなり。

人間一面の機能、即ち精神的現象の一面のみを見る宗教學者の言としては、宗教は宗教意識の設定ならん。されど宗教學者は更に其以上に溯りて、奈何にして人心に此機能顯はれ、此種の靈妙なる現象の起るかを探求せざるべからず。若予は唯精神現象のみの研究を



以て任すれば、其は吾等の關する所にあらずと云はゞ、吾等は敢て之を攻むるを須ひず、されど若彼等にして万一説明已上に容喙して之を否定するが如き行爲ありとせば吾人は斷じて其不可を鳴さるべからず。

元來、宗教は過去數千年來既に事實として存在せり。心理的事實とし、社會的事實として、個人的に團體的に。此至大至廣至明至白の事實を否定するにこそ説明を要するなれ、此を肯定するには、何等の説明も要せざるなり。

思ふに宗教學者は、宗教的現象の事實を、出來るだけ完全に、出來る丈精密に、説明すべきものなり。然るに若、其成立を危くし、且之が破壊を促がす如き説明を爲すあらば、彼等は學者としての本分を忘れたるものなり。研究家の態度を踰越したるものなり。元來

哲學者や宗教學者は、宗教に就ては多くは門外漢にして、宗教の形骸已上を知らざるものなり。彼等は奈何に多くの宗教教理を知り、儀式を知り、信條を知り、之を統一し之を説明するも、これ唯形骸的統一なり、理論的統一なり。我身に實驗し鑄治したる活氣沸騰たる生命は、彼等の中に些も存せざるなり。ヘイケルの含有一元的發展の宗教も、「ハルトマン」の厭世發展的具存一體教も、理論上は何人も其精緻巧妙なるに感ずれども、實際上其價値のゼロなる事は又何人も承認する所なり。まして今日の宗教學者や宗教哲學者が宗教の改革者を以て任せんとするが如きは、案山子の空威張と同一、全く己を知らざると共に、宗教其物をも知らざるものなり。吾人は少しく其冷前頭を以て、古代の宗教家の性格と行爲とを考へんことを勸告せざるを得ず。



世に存する法則の中、ニュートンが運動の三大法則ほど確然明晰なるものなし、然かも近時の天文學者は、最早之を以て總ての天體を説明するに足らずとするに非ずや。されば學者は先與へられたる事實を、最も明了に最も完全に説明するを以て足れりと思はざるべからず。若今日の法則にて説明する能はずんば更に他の法則を以てし、若一の方式を以て解答する能はずんば、更に他の方式を以て、要するに學者の研究題目に對する態度は、常に消極的受動的ならざるべからずとは、彼等自身が常に吾等に教ゆる所なり。

若、或學者の云ふ如く、宗教は唯一の精神的事實にして其範圍は、唯吾人の精神界にのみ限られ客觀的價值なし、まして絶對的價值に於てをや。佛陀と云ふも人間理想の反影、淨土と云ふも吾等が欲望の客觀化に過ぎず。救済も罪惡も畢竟一種の精神作用に過ぎずとせ

ば、説明上の結論としての信仰は破壊せらるべし。されど宗教其物は破壊せらるべきものに非ず、信仰其物は絶滅さるべきものに非ず。生命あるものは一株の草根すら、刈り取られ焼き拂はるゝあとより、萌れ出でゝ來るに非ずや。まして彌陀覺王の念力、永劫不磨の眞理が、學術や説明位で絶滅するものならんや。

思へ、卿等、吾等奈何に宗教的要求が烈しければとて、自分の理想の影に過ぎざる佛をたのみ得るか。吾等奈何に生死の問題に戦慄ければとて、欲望の客觀化たる淨土や、夢幻に等しき淨刹に希望を懸け得るか。

宗教的事實を忠實に説明するを以て其任とすべき學者は、心理上より見たる設定的事實に對して、永遠の根底を認めざるべからず、絶對的價值を認めざるべからず。淨土も實在とし佛も實在とせざる



べからず。若之を否定すべくんば、其は學者研究家の權限を踰越したるものなり。

彼等或は云はん、元來淨土の實在を信じ、靈魂の永生を信じ、人格的實在を認むるなどは、幸福主義の幼稚なる宗教形態なり、此等幼稚なる宗教を止抑して、現世的倫理的哲理的の、最高等なる理想的宗教に導くは、學者として何の不可がある、これ宗教を破壊するものに非ずして、之を改善するもの、一切の宗教を蒐集し、其發展の程度に依りて、一定の位置と意味とを與へ、之を統一する學者の態度として、これ實に至當の事に非ずやと。

まことに、卿等の宗教論は高尚なり、科學に合せざる靈魂の不滅を排し、哲理とかに合せざる人格的實在を去り、淨土を否定し、佛陀を追ひ、合理的に倫理的に、理想的宗教を建設せんとす、其意氣

や壯、其舉や快、されど吾等は、今明に卿等に向ふて豫言を試みんと欲す、卿等よ、卿等は千辛萬苦幾多の頭腦と幾多の歲月を経て、漸く其目的を達するの日は、卿等が世に所謂、勘定合ふて錢足らずと云ふ浩嘆に沈むの時なるを、宗教は尙幾多の改革を要すべし、されど決して、卿等を煩はすまでに、人を失はざるなり。

要するに世の宗教學者よ、宗教哲學者よ、卿等は卿等の理性的頭腦を以て、多の宗教を蒐集し、統一して、眞摯に道を求むるものに、其材料を供給すれば足る、努めよ既存の宗教に對して、破壊的態度なく、常に忠實なる説明者を以て任せよ。



## 五 宗教家の誤解

學者の是非にかゝはらず宗教の聲、信仰の叫、口に筆に、雜誌に新聞に、至る所に反響呼應せられ、日曜講話、演説、説教の、新紙上に報導せらるゝものを見るも、常に二十を降らず。まして名の知れざる教會寺院、若くは普通民家に於て、宗教の傳へらるゝもの、信仰の教へらるゝものは、決して尠少ならざるべし。物質的文明、皮相的開化の爲に、人類の精髓たる心靈的生命の、憔悴枯渴せる我日本國民の爲に、奈何に喜ばしき事ならずや。少しく靈界の榮光に浴し靈氣に養はれつゝある我等、此喜ばしき現象を見る毎に、我十方に満ち給ふ無碍難思の大靈に對し奉りて、感謝咨嘆の情止む能は

ざるなり。

然れ共、翻て此等幾多の宗教的傳導者、若くは求道者の中に於て、宗教に對する根本的誤謬の見解に陥りつゝあるものあるに非るやを懸念せざるを得ず。思ふに、宗教は人生の目的に非ずして、畢竟其目的に到達する道なる事は、倫理學が、人生の目的に非ずして、至善に達する方法なるが如し。而して宗教の眞髓を以て、信仰にありとせば、宗教の信仰なるものは、決して人生の目的には非ずして、唯これ或他に偉大なる目的に到達する、手段方法に過ぎざるなり。然るに世に一部の人々あり、宗教其物を以て、人生の目的の如く考へ、宗教の或特殊の信仰状態を以て、其究極理想の如く思ひ、頻に其精神状態の微妙を稱へ、靈趣を語り、以て自己の職責を盡したるが如く考へつゝあるに非るやの感なき能はざるものあり。勿論信



仰状態の妙趣靈感を語りて、之に誘引する事は其の究竟目的に到達せしむるの手段方法として、必爲さざるべからざる事なれども、若唯此妙趣靈感其物を以て人生究極の目的と信じ、又之を傳ふるものあらば、予は斷じて其不可を鳴さざるを得ず。此の如きは、これ神秘的感情の濫溺者にして悪るく云はゞ、精神病者の空想を樂しみ、善く云ふも詩人藝術家の、不生産的美想に耽溺するものと異らざればなり。

然らば宗教の目的とは何ぞや、吾等の信する所によれば人生に於ての光明攝取と、死後に於ての靈覺とにあり。而も人生に於ける光明攝取は、尙方便若くは自然の具徳にして、眞の究竟目的は、死後に於ける大靈との一致融合に存す。即ち語を小乗教に籍らば、人生の終局目的は涅槃にして、而も眞の究極理想は、有餘の肉體を離れ

たる死後の無餘涅槃にあり。それ爾り、宗教の眞目的は、死後に於て靈覺に達し、大靈と一致融合して、自己本有の眞相を顯はすにあり。之を惡毒に對して云へば、永劫の解脱と云ふべく、罪惡に對して云へば、永遠の救済と云ふべく、無明に對して云へば大悟究竟とも云ふべし、眞大悟、解脫、救済、靈覺、融合の、其方法として、又自然の手段あり、法爾の方法あり。換言すれば、無作の本願あり無縁の大道あり。又其本願にも眞あり假あり、大道も方便を垂れ、眞實を示す。而して方便より眞實に假法より眞法に、宗教の經驗、信仰の修習進む時、感應空しからず、道交歴然として、精神の秘奥に、微妙なる靈趣を生ずるに至る。

然れども、此等の靈趣妙感は、偶以て宗教の眞實を證し、靈覺に到達し得るの豫兆を示すものにして。若過りて之を終局理想の如く



考ふるものありとせば、そは其妙趣靈感なるものも、未宇宙の本願、心霊の琴線より生じたるものに非るや明なり。若果して然りとせばかゝる妙趣靈感を以て、宗教の目的なるかの如くに論斷し、誘導するが如きは、これ彌許すべからざる大誤謬の見解なりとす。

要するに、宗教の目的は、宗教に非ずして死後の靈覺にあり。信仰の目的は、信仰の微妙なる精神状態に非ずして、究竟の靈化にあり。換言すれば、宗教の究竟目的は、全く宗教の力に依りて、宗教無用の状態に到達するにあり。信仰の究極的理想は、信仰の力に乘じて、信仰を忘れたる状態に到達するにあり。昔者臨濟宗の開祖臨濟、心霊上の苦悶に絶へずして、其師黄檗に三度佛法的の大意什麼と叫べる時、黄檗三度鐵拳をふるうて彼が頭上に加へたり。悟らず。去りて大愚を尋ね、問答の始末を述べたる時、大愚沸然色を爲

して云く、黄檗は何たる氣の長き和尚かな、若吾ならば咄一聲の下に汝を打殺さんものをと。

今の世の宗教傳導家、此鐵拳を免るゝもの果して幾人かある。



## 六 觀念的解脱と實在的解脱

解脱すべきもの多しと雖、之を幸福主義より見たる禍惡、即ち惡毒と、道德主義より見たる禍惡、即ち罪惡とに外ならず。煩惱と云ひ、業垢と云ひ、繫縛と云ひ、苦痛と云ふものは、畢竟此二者に外ならずして、此兩者の脱離は、頓て人類一切禍惡の解脱、自在の大安樂境なり。

此惡毒及罪惡を脱離するに二種の方法あり。一は觀念的解脱にして、他は實在的解脱これなり。觀念的解脱とは、一切の罪惡惡毒を、全く自己主觀の迷妄に歸し、心機の轉換に依りて、理想的に、智力的に、之を解脱せんとするもの。實在的解脱とは、其の根源を、客

觀的事象の上に認め、意志に依り、力行に依りて、事實の上に之が解脱を試みんとするものなり。

抑、人は身心の相關より成り、自他の相對より成る。吾人一心の運用に依りて、肉體に影響し、他人に影響し、自然に影響すると共に、自然他人及肉體に依りて、我一心の左右せらるゝも又明なる事實なり。されば人類一切の事象は、勿論、宇宙萬般の状態も、全く内外兩界の關係、身心相互の交渉の結果にして、決して自然及肉體に偏すべからざると共に、又決して一心に偏倚すべきに非ず。而して觀念的解脱の位地に立つ人は、此兩界の交渉より成る萬有を、全く主觀に依りて解釋し、一心の變轉に依りて決定せんとするもの。實在的解脱の主唱者は、寧ろ事象の上に重きを置き、常識を以て之を説破せんとするものなり。



世界に於ける人文史の事象は必此兩者何れかの傾向を顯はす。科學は該して實在的解脱の傾向を顯はし、哲學は觀念的解脱の風貌を具ふ。哲學中にも唯心論、觀念論、汎神論は、觀念的解脱の傾向を示し、唯物論、常識哲學、コント主義は、實在的解脱の傾向を有す。倫理、法律、經濟、道德、政治、教育は、主として客觀に重きを置き、藝術宗教等は特に主觀に中心を据ゆ。

宗教中にも、基督教は比較上客觀に重きを置き、佛教は主として一心に重きを置く。佛教中にも、小乗教及權大乘教は、寧ろ實踐修道に重きを置き、實大乘は直に主觀の一念を以て解脱を試みんと欲す。那の天台が一念三千速疾頓悟と云ひ、花嚴が萬有宛然遮那出纏の果相と談する。眞言が父母所生身速證大覺位と喝し、禪家が一念不生即佛と説破し去るが如き、これ實に其例證なり。

果して萬有は一心の運轉のみにて解釋せらるべきや。若くは客觀的解釋のみにて満足せらるべきものなりや。總て人文の發達は、文學と云はず、哲學と云はず、藝術と云はず、宗教と云はず、皆有より空に入り、中に入り。客觀より、主觀に入り、相關に出で、初て其極に至るが如く。吾人々類の祖先が、始めて世の禍惡を感じ、之が解脱を求めたる過程に於て、千態萬狀參差重々なりと雖、又此の如き過程を経たるものならざるべからず。彼等は先、禍惡を常識に依りて、客觀的事象として、之を脱離せんと欲し、畢生の心力を注ぎて人生と闘ひ、自然と争へり。而して此傾向の漸次進歩せるものは、實に今日吾人が所謂物質上の文明、科學上の發見、倫理、教育、政治、法律、經濟、實業等と云ふものに外ならず。かく人類は、一面には一切の禍惡を客觀的事象として、之と争ひ、之を證し、自然



社會肉體の改良より、一心の解脱を試みんと企てたると同時に、他の一面には、一切を自己一心の運轉に依りて、解釋せんとするの傾向を示すに至りき。然り、客觀的解釋、常識的解釋は、萬人の以て隨同すべき穩健なる所説に相違なきも、之を宇宙全體の主義、之を大なる人類の主義としてこそ、幾分の効果を奏すべきが如しと雖、現に罪惡と惡毒とに惱み、懊惱叫喚呻吟しつゝある個人の上には、到底痛切なる効果あるべきに非ず。醫學の進歩は遂に人類を不死のものとするやも知るべからず。されど今日吾人の生命は又奈何ともする能はざるなり。教育の進歩は、總ての人類をして常識圓滿のものとなしむるとせんも、今日の不健全なる我等は、奈何ともする能はざるなり。社會主義の實行は、遂に人類を平等の享福に導き得るとするも今日の貧富懸隔嫉惡憎賤せる社會には、何等の効益あら

ざるなり。尙「ハルトマン」の發展的厭世論は、宇宙の解釋としては「ペーゲル」「シオペンハウエル」の折衷として、或は「シオペンハウエル」に一步を抽きたりとするも、個人の痛切なる感化の上には「シオペンハウエル」の個人的厭世論に比すべくもあらず。宇宙全體、大なる人類に恰好するかの如き、常識的解脱主義は、到底小なる宇宙小なる個人の主義として満足する能はざるなり。人類を重んじ、黄金世界を夢想し、個人——此血、環ぐり泣き叫び笑ひ樂しむ現實の此個人を蔑視する主義は、吾等を満足するに足らず。主觀的解脱主義は此目的を以て世に出でたり。藝術、宗教、哲學は、該して此傾向の發展せるものなり。要するに宇宙一切の人文史的現象は、身心、自他、内外兩界の交渉より成る人類が其の交渉相關に依りて、生ずる禍を解脱せんとして、主觀若くは客觀の兩面に於て、觀念的



及實在的解脱を試みんとせる結果経路に外ならざるなり。

我國現時の宗教論、又此兩種の傾向を有するは疑ふべからざるが如し。吾人の所見若し誤に非すとせば、『精神界』の一派は、該して觀念的解脱主義にして、倫理宗教理想宗教を唱ふる新宗教『新佛教』の一派は、確に實在的解脱主義なり。而して前に述ぶる如く、世界に於ける人文史的一切現象は、必ず觀念實在の兩解脱主義の何れかに存するものなるを以て、宗教論二種の傾向は、これ實に宇宙人類を折半して代表する、堂々たる二大主義なるを以て、吾等は茲に謹んで其兩主義の語る所を聞き、以て吾等が此に對する所信を開陳せん。

倫理宗教實在的解脱宗教の人々は云ふ、宇宙には一定の意匠あり目的あり、萬有は皆此目的に依りて進み、此目的に對して各一定の位

置と價值とを有す。而して此目的意匠は、實に六合の聖意即ち神の御心にして、其は美的道德的靈福のものにして、吾人々類は敬虔に此目的を奉戴し、翼賛し、此意匠に隨喜し、信托して、或は身心の調和に、或は人類相互の諧調に、或は人類と自然との和合に向ふて、倫理に、經濟に、政治に、法律に、教育に、外交に、科學の研究に、藝術の應用に、各從事せざるべからずと云ふ。惡毒と罪惡とは、畢竟身心の不和、人類相互の衝突、人類と自然との反對より生ずるものにして、これ遂に人類に對治せられ、滅却せらるゝ爲に存在するものにして、人は勇往奮進、その神意聖命を奉戴し、此惡毒を對治し、此罪惡を滅除し、以て理想の黄金世界に入らざるべからずと。

精神主義の人は云ふ、宇宙の萬有は吾人の一心に關係して、初めて善惡苦樂功罪美醜と映し來る。されば純乎たる客觀的事象は措い



て問はず、苟も吾人の心裡に映し來るものは、皆一心の制約に、依るが故に、之を善惡美醜と判断するの權限は、畢竟我の一心に外ならず。而して此一心を關鍵として、宇宙萬有を解釋する時は、宇宙は一大光明の發現、至美至樂の妙土にして、茲には些の惡毒なく、又罪惡もなし。而して此世界に悟入せんと欲せば、唯一切を包容して漏らすなき佛の大悲を仰がざるべからず、而して此佛の前には、善人も救はれ、惡人も救はれ、男子も救はれ、女人も救はれ、智愚貴賤皆等しく救はるゝものなり。されば世の罪惡に惱み、惡毒に苦しむものは、速に此佛に依りて、那の妙域に悟入せざるべからずと。此兩主義、共に人生の必要に依りて自然に生したるもの他力本願に達する契機として一定の必要と目的を有するに相違なしと雖、予を以て之を觀るに未だ完全究極せる主義たるを認むる能はず。客觀

的解脱主義は穩健にして常識に合し、以て宇宙と人類全體が歸向すべき標的たるに似たりと雖、而も吾人は之を以て全然眞理なるを認むる能はず。奈何にも科學の力に依りて自然の人類に諧調するところあるに至れるは疑ふべからず。社會改良の經營に依りて、人類相互の便宜を増進せるところあるは事實ならん。然かも人類全體の上に於て惡毒は奈何程除去せられたるか。道德の分量に於て社會は奈何程善良に越きたるか。これは粗朴なる惡毒に易はるに精細ある惡毒來り、野蠻なる罪惡に易はるに、巧妙なる罪惡の來れるあるのみ見よ、社會至る處に凶惡の行はれつゝあるを、きけ、行く處に怨嗟の聲あるを、更に之を大きく見よ、諸行無常是生滅法、進化と呼び發達と呼ぶ宇宙の時々尅々は、これ永劫の滅亡に越きつゝあるに非ずや。此の如き宇宙に對して幸福を得んと願ふこれ無理なる要求に



非ずや。更に之を微細に思へ、語黙去止悉皆我慾、道德と呼び善事と云ふもの、事々物々皆罪惡の府に趣きつゝあるものに非ずや。此の如き人世に於て、善徳を得んと願ふ、これ最も不合理なる希望に非らざるか。

客觀的解脱主義は、宇宙の主義としても不當なり、況して個人の主義とするをや。客觀的解脱主義は、健全は即ち健全ならん、而も能く吾人を罪惡より救ふに足らず、惡毒より光明に導く能はざるなり。其は惡毒と罪惡とは、客觀的事象の上に關係なきに非るも、寧ろ其最深最本の病源は、實に吾等が本心の上にあればなり。此病を喝破し一舉此病府を突き、人類一切の禍惡を脱離せんとするもの、これ實に主觀的解脱主義なり。此主義に於ては、決して客觀を客觀に依りて扱はず、直にどりて以て主觀の判斷場裡に置き、罪惡、惡

毒、苦惱、不自由、束縛、壓制を、悉く我が一心の迷妄と爲し、能く心機の轉換に依りて、活潑々地に之を處理せんとするもの。之に於てか、前には刻苦經營年月を積むも尙脱する能はざりし苦痛を、今は一念の轉機に依りて離るゝ事を得、前には専心一意、力行刻苦して而も達する能はざりし道德の苦痛を、今は一念の工夫に依りて巧に超脱するを得たり。これ精神主義、主觀的解脱主義か、我等に與ふる偉大なる恩惠なり。

されど、主觀的解脱主義は、果して完全の安立を吾等に與ふべきか。勿論機縁千差なり、一該すべからずと雖も、若、迷妄深き我等に依れば、未だ容易に然りと答ふる能はざるなり。然り吾等は前に客觀的解脱主義を、個人の上にも、宇宙の上にも、到底禍惡を脱離する道に非すと云ひき。而も吾人は、常に罪過と惡毒の解脱に對しては、



此の如き客観的、實在的解脱を要求して止まず。吾人は主観的解脱主義に依りては、能く心機の轉換に依りて、理想的に禍惡を解脱するを見たり。されど吾人は此種の解脱に對しては、一種の忘罪術、忘苦術なるに非らざるやの感なきに非ず。吾人の希望は、寧ろ心機を轉換せずして、其まゝ禍惡なきの境に至らん事を希望して止まざるなり。病に對して、病に非ずと考ふるよりは、寧ろ健全の身體となりて、病なりと考ふるも能はざるの境域に達せん事を望んで止まざるなり。ハルトマン氏は、此點に於て明了の解釋を施して云ふ。吾人神の聖奇なる目的を知りて、幸福主義の立地を脱却するは、惡毒の理想的解脱なり。吾人生命の滅亡は、即其が實在的解脱なりと。吾人は五十年の長さ人生の旅路に於て、理想的解脱觀念的解脱を希望して止まざるなり。されど吾人は、更に心機の轉換に依らずして、

任運自然の大樂を成すべき、實在的解脱の獲得は更に、吾等の渴仰して止まざる所なり。若しハルトマンの唱ふる如く、吾人の死にして果して實在的解脱なりとせんか、吾人は奈何に樂しく、五十年の末を待たんも、臨終の夕を待たんも、而も吾人は容易に此説に安立する能はざるなり。

吾等は、觀念的理想的解脱主義のみに依りては満足する能はざる事前の如く、而も世の所謂實在的解脱の、吾等を満足せしむる事能はざる事此の如し。有と空とは既にあり、客観と主観とは既に過ぎたり、中道相關の圓滿なる教義は世に存せざるが。曰く之あり。師親鸞の唱へ給ふ往生淨土教なり。往生即成佛の法これなり。一念盡十方無碍の願海に悟入する時は此世にありて既に其攝取光中の人となる。此光明は能く吾人我欲の心機を轉換せしむる清淨歡喜智慧の



光明にして、一たび此光明の攝護裡に入るとせんか、一切の罪惡は其宥恕に依り、一切の惡毒は其矜哀に依り、最早罪惡として我が心を苦しめず、惡毒として我が心に滯らす。これ即ち理想的に禍惡を解脱したる觀念的解脱に非ずや。若し一たび六尺の穢骸を世に残す時一念須臾にして那の安樂至徳の土に往生す。これ眞に實在的解脱に非ずや。其が土は奈何にして成し、其が土は何れにあるかは、敬虔に我大師親鸞の教へ給ふ所にきけ。

要するに、師父親鸞の所説、淨土他力の法門は、これ主觀客觀の兩界に跨り、觀念實在兩種の解脱を併はせ、宇宙人類の渴仰の焦點要求の中心たり。若し世に實在的解脱に失敗し、觀念的解脱に甘んずる能はざるものは、來りて此他力の法門に入れ。

## 七 私の信仰の變遷

元來私が宗教に向つて求めた處は、此現實なる生其物の解答を望むと共に、將に來らんとする死の解答を求むるのである。私は此世を安く送る爲や、巧に世を渡る爲や、甚しきは、自分の野心を巧妙に果たす爲に、宗教を求むるものではありませぬ。私が、何程種々の哲學上神學上の理窟を並べましても、死と云ふ重大嚴肅な問題に至りますと、皆砂上の家と一般で、忽瓦解してしまふのであります。私が元來宗教の門に入りましたのは、實に此解釋に苦しむ餘りでした。私は白狀いたします、私の或時期に於ては、餘り多く現在の境遇に苦痛を感じて、何時も口辭に云ふたです。人生は丸で荒涼たる



沙漠の様で、社會は皆鬼でありて、生活は常に閻魔王の前を通過する様に感ぜられて、苦しくてたまらないから、未來問題も恐ろしいが、現在の苦痛は尙たねられない。未來の苦痛を脱するも必要だが、焦眉の急は眼前に迫まりて居る。で私は、宗教に依りて先此現在の苦痛を脱せようと勉めたのであります。して其苦痛は何に依りて起りたのだと云へば、私は唯宇宙強壓とでも名くるより外云ひ様はありませぬ。勿論一々其精神内容を分析したら、心理上の關係もあり、生理上の影響もあるでしやう。智情意の衝突もあらう。理想と現實、意志と肉體との撞着もあらう。最終目的と一時目的との衝突もあらう。私慾と道心との戦闘もあらう。胸中の劣情を知らすまいとの努力もあらう。實に當時の胸中は、心魂今攪亂され蹂躪され、支離散落とでも申しませうか。山鳴り地裂くる波濤の、狂ひに狂ひ、荒れ

に荒れ、震天動地の激戦を、ソツとこらへて、水面のみは平々坦々たらしめんとする、太洋の心にも壁へませう。英の文豪カーライルが詩聖マンテの肖像を評して、數層の氷下に唇を噛むと申した那の評が、最も能く自分の感情を顯はしたでせう。で、私の當時の考は、唯此苦痛を脱したいと、求めた外は何にも無かつた。隨て最深最本の死に對する問題は寧ろ現在の爲の方便の様になりてしまひました。特に科學哲學歴史の智識に依りて、死の問題は彌冷淡になりて來て、靈魂不滅と云ふ事すら、遂には信せられぬ様になりて來たから、今度の宗教に對する希望は、此苦痛を脱却して、何でも偉大なる人物になりたい。大人物とは、實力ある人、即道あり、徳あり、才ある人で、よし總理の倚子に登れぬとも、總理の位置に値する人。大學者として世に知れずとも、大學者に價する丈の價值が



欲しい。人を害せずして我身を立て、人を導きつゝ、我身も登らん。而して之を善くするは、獨唯宗教に限ると思ひました。で此時の宗教觀は、宗教を最も巧妙なる處世法、苦痛の療法、不平の慰安所として知らずく眺めて居りたのです。で私の信仰は最早死の問題に關係がなくて、生の問題である、未來主義でなくて、現世主義、現在主義、となりた。

しかし私は、最早斯様な宗教には、寸時も満足が出来ませぬ。成る程五十年の人生は頗重大であらう、スタアンの事實であらう。けれども、之を永劫の時間に比ぶれば蟬蛻の一時である。之を無限の宇宙に比ぶれば滄海の一粟ぢやないか。私は何時も天を望んで、戰慄し、死を思ふては思はず飛び上るです。噫私は實に誤まりた。僅の人生の爲に眩せられて、此重大なる問題を忘れ、眼前の小利に迷

惑して永久の生命を失はんとした。宗教が若一個の處世法なら、所謂當世紳士は確に其高僧である。一の不平の遣場なら、一杯の酒と何の相違がある。宗教が人物の訓練法なら、一個の完全なる教育法に過ぎない。平和の處世法なら道二翁の心學道話や陽明學は尙一層巧妙なもので、若宗教が宇宙觀なら哲學と何の撰ぶ所があるか。宗教は實に死に對する解釋である。五十年の生の解釋でなくて、永劫に對し無窮に對する生の解釋であつたのだ。私共は靈魂不滅の證明は出来ない。鴻學韓圖ですら、純粹理性批判では全く絶望して實踐上之を説明した。兎も角中世紀の唯理論者も、近世の批判哲學者も、其説明は色々ある、即認讓説明には色々あるが、而も云ひ合はせた様に、靈魂の不滅でありたいと云ふ事を希望して居るが、不思議ぢやないか。否世界の一人一人でも、此に不服を云ふ人があらふ



か。たとひ佛國十八世紀の啓蒙時代の唯物論者でも。靈魂が不滅とすれば、死は實に人生恐怖の最大事實である。吾々の罪惡に對する説明即認識は、之れを父祖の遺傳と團體的遺傳とに歸するも善からう。又アダム、エブの罪惡の遺傳と云ふも善からう。又無始以來の薰染に依ると云ふ業感縁起の説明も宜からう。忽然念起名爲無明の眞如縁起論も宜からう。又罪惡は人性其物の不完全に依るので、決して罪惡に責任はないと云ふも宜しからう。けれども死に對する恐怖のみは依然として残りて居る。誰か死に對し宇宙に對して、最も敬虔に最も明了に、吾は一點の罪惡なしと云ひ得る人があらうか。此直徑三千里許に過ぎない小地球の中に頭を突き込んで、愛とか、義務とか、利害とか、權勢とか、名譽とか、位階とかに心を奪はれて居る間は、どんな熱でも勝手に吹いて居られやうが、此は皆世に

云ふオクヲ縁辨慶、椽の下の力持だ。深更一夜墓原に睡るさへ氣持の悪い卑怯者が、此大なる宇宙此暗黒の死に向ふて何が云へ様ぞ。宗教は實に此死を救ふて永劫の生に歸せしめ給ふものである。靈魂不滅は事實として信するより外仕方がない。罪惡の説明は何をも腑に落ちる様解釋をするも善いが、其が事實として存在する事は信せねばならぬ。救濟者の過境的實在の、説明は説明、議論は議論だが之を信せずには人生は墓原になりてしまう。古往今來誰か一人此人を求めぬ人があるか。東西兩洋何者か此物を探がさぬ人があるか。世界宗教史は明に之を證明して居る。土蠻の探究結果は明に之を教へて居るぢやないか。凄惨な死を遂げんと思ふ人は信するな。人世を夢幻と思ふ人は信するな。されど渴して水を求むる人、なぐられて忽怒る人は、之を信せず居らるゝか。佛法の大海には信を以て



能入とす。宗教の殿堂は信仰の鍵に依らざるべからず。佛の光明は智識の目には顯はれ給はずして、唯信の前にのみ約束し給ふものである。此は、世界史の教ゆる所、心靈の實驗する所である。宗教は處世術ならず、宇宙觀ならず、不平の遺場に非ず、大人物になる道に非ず、唯永劫に對する人生の解答あり、死に對する最後の解答である。

## 八 私 の 懺 悔

私は、私の感謝や改悔の思に就ては、あまりに廣大で、あまりに深刻で、之を與へ給ふた、私共のみ佛に向ひ奉りて、實に何とも感謝の致しやうが無いのであります。

私は、至尊の大慈悲に満足し、至尊の矜哀に感謝して居るものであります。勿論私は、或時に於ては、私の淺薄なる科學とか哲學とか歴史とか云ふ智識の爲に盲せられて、至尊の救済を、唯吾等の心理作用、概念の作用でないかと疑ふた事もある。又或時には、吾々の靈魂は永遠のものでない、肉體の死は同時に精神の死ではないかと思ふた事もあり。至尊の眞理、心も言も絶へ果てた様な高い



此上もない高い御誠を、私の様な小さい。此上もない小さい、主観の形式認識の形式に待たねばならない様な、まことにあはれな有碍の智恵を以て、解釋が出来、説明が出来て、あらふと思ふた事もあつたが、是は全く私の僭越でありて、實に慚愧に身を裂かるゝ様に思ひます。で私は、至尊の偉大なる御方に依りて、再又幼時の信念に立ちかへる事のできた事を、私は衷心より至尊に感謝するものであります。

世の哲學者、宗教學者と申す人特に所謂新宗教家、新佛教家と申す人々は、宗教は哲學的である、論理的である、現世的である、倫理的である、社會的であると、申します。

元來、宗教とか信仰とか云ふ一定の名稱ができたものであるから、至尊の此清淨圓滿の眞理も、遂に學者とか研究家とか云ふ人々の、

批評の俎上にのせられる様になりて、一般の他の社會的現象や、社會的事實と同じ様に是非せらるゝ様になりたは遺憾にたわられぬ。

全體、人間智識の價値に就ては、鴻學韓圖が既に明丁の解釋を與へて呉れて、其以上には何とも云ひ様がないではないか。彼は云ふ、人間の理性は範疇と云ふ主観の形式を豫想するものであるから、此の範疇内へ入り來るもの、即ち現象界經驗界の事實は知る、ことができるが、超經驗的問題は、到底知る事ができない。しかし斯様にする、宗教的眞理は否定のできないと共に、肯定が又できないから、それでは精神内の奥底の叫が承知しあひ。で神の存在や靈魂不滅の問題を、無理無體に、道義上より説明してしまはれた。全體至尊の事が、人物で説明できる理由がないから、人智で説明すれば、不完全な事は言ふまでもない。ですから、韓圖の實踐理性批判の證



明が、多くの攻撃と非難を受け居る、しかし兎も角彼は知らず  
 人智の及ばぬところに、尙何かを認めねばならぬ事を教へて呉  
 れるだけは有難いと思ひます。至尊の實在や靈魂不滅を教ゆる希臘  
 の大哲學者プラトンと、此人智の本性を明にして呉れた韓圖を以て  
 世界中の人が、哲學界の二大明星と稱讚して止まないのは、世間の  
 人は知らずくではありませうが、此二人が全く至尊の眞理を、  
 哲學者として最も善く世に示す點に於て、其本分を全ふしたからで  
 なくてはならぬと思ひます。實に永劫の眞理不可思議の佛智に  
 就ては、人間の智識は到底及ぶ事ができないものである。  
 佛よ。實に至尊の授け給ふ眞理は、人智と云ふものを以ては、  
 矛盾々々根本的矛盾で満たされて居ります。まことに至尊は、遠い  
 非常に遠い所に在しながら、近い近い此上もない近い所の人で

在し。過去の昔に既に成佛し給ひつゝ、更に吾等の救済と共に成佛  
 し。無條件に私を救済し給ひながら、同時に條件を立て給ひ。一神  
 教的佛身に即して、汎神教的相好を顯はし給ふ。吾等無量劫かゝり  
 ても、思議推度する能はざる人にして同時に、愚者にも幼者にも、  
 悪人にも、女人にも、無縁の大慈悲として拜まれ給ふ。此の如き矛  
 盾を數へたならば、殆んど限はないが、兎も角、至尊の眞理は、哲  
 學的でもなければ、論理的でもない。

又至尊の眞理を、倫理的であるとか、少くとも宗教は倫理的であ  
 るとか、なければならぬとか。何たる狂語ぞ、韓圖も、ヘーゲルも、  
 又ハルトマンなども、幾分か斯様な考の様であるが、之が即メクラ  
 の窓ノヅキで、宗教を堅に求めないで、横合から解釋するから、斯  
 様な結論が起るのである。萬一學者が云ふ様に、至尊の大悲が倫理



的に成立して居るならば、誰か一人至尊の救済を得るものがありまじやう。十方衆生皆唯叫喚と悲嘆に沈む外はないのである。全體世の倫理とはどの位な価値があり、倫理上の善人とは何程位の価値があるか。まことに、至尊の第十八願、宇宙唯一の真理——若世人の言で申すならば、有限が無限の世界に通ずる唯一の道、現象が實在界に達する唯一の間道——が、倫理的に成立して居りましたなら、十方衆生の誓願は徒事になります。否一人でも御助けに預る機はないのである。み佛よ、私は至尊の本願が、丁度愛に目のない母の如く、一切の流れを受けて厭はぬ大海の如く、全く倫理以上に超越して、無縁の大悲を以て救済し給ふ事を感謝致します。

又宗教を以て現世的でなくてはならぬ社會的でなくてはならぬと云ふ人等は、全體地獄とか浄土とか云ふ様な事は、古代の迷信であ

りて、斯様な迷信的、厭世的、往生浄土教の思想が我が國に行はれて居るものだから、國民一般に勇氣がない、活氣がない、これ吾國進歩の一大公敵であるから、早速斯様な迷信は打ち砕いて、倫理的、活動的、現世的の宗教を奉せねばならぬと。私は實に此世の中ほど無價値な無意味なものはないと思ひます。財産も名譽も、位階も、權勢も、又所謂道德とか云ふものも、哲學上の真理とか云ふものも、私の畢生の心血を注ぎて、朝から晩まで、煩悶し、焦慮するには、あまりに劣等であまりに無價値ではあるまいか。近來吾國に頗るニーツエの研究が起り、又美的生活論の唱道されるに至りたのも、全く此故と信じます。人生が唯一の至尊の真理に趨くものを見て、初めて此世に價値があるのである。心血を注ぐ必要も起りて來るのである。若社會夫自身が目的であり、人生其物が目的でありて、其以



外に目的がないならば、社會や人生程、無意味な又殘酷なものはないと思ふ。

又一派の人は斯様な事を申します、吾々は宇宙に一定の目的と意匠とを信ずる。宇宙は全然進歩し、發達するものである。宇宙は遂に理想の黄金世界に到達する。吾等は此宇宙の目的意匠を知り、之を體認し、之を翼賛して、能ふだけ理想界の爲に貢献せねばならぬ。これ吾等の信仰であり宗教である。何たる純潔の信仰であり、宗教であるか。來らん黄金世界の爲に我が身を捨て、未來の人類の爲に我身を埋め草にする。純潔なる人よ、高潔なる人よ、私は汝の言を敬す、されどこれ汝が客觀的批評的の語でありて、眞實汝が心靈的の言にあらざるよ。思へ、黄金世界は果して何處へ來るか。地質學者は此地球の瞬時にして破壊する事を教ふる。天文學者は奈何な

る天體も遂に全く破壊する事を教ゆるではないか。此地球上に黄金世界が來ると云ふも、迷妄なれば、宇宙が理想に到達すると云ふも迷妄である。此宇宙に一定の目的のあるは事實である、意匠のあるは事實である。しかし其目的其意匠は、唯吾等を常住の寶利に救ひ導くべき目的意匠に外ならぬのである。論者が此見へきりた地質學上の事實に對して、尙理想世界や黄金世界を此世の終局に設定する所以のものは、どうしても、現在の世に満足できずして知らずく光明の世界を憧憬して居ると云ふ事を顯はして居るのである。論者の論法を尙一步進むれば、厭でも厭でも、未來主義になるのである、往生淨土主義になるのである。

現世主義は人生を無意味にする、殘忍のものにする、餘裕なくする。隨て罪惡を生じ、苦痛を生じ、悲哀を生じ、萬人を苦しましむ



る。これ宇宙の眞理を無みし、吾等が父の教に背くからである。願くば大慈大悲の父よ、早く汝の善巧の手をひきて、現時の迷へる宗教論者や、美的生活論を鼓吹する人々、及世界の歸すべき所に惑ひつゝある幾多の人をして超哲學、非論理、非現世、非社會的の信仰、即永遠の眞理、不朽の信仰に入れしめ給へ。

## 九 私 の 歡 喜

私共が、朝早く起きて太陽の將に出でんとする曙の景に向ひましては、何となく云ふに云はれぬ愉快の感があり、又夕遅く我家に歸るとき、四面暗瞭たる中から、遙に窓もるゝ光りを見る時には、何となく心丈夫の思が致します。之は人性自然の情でありて、人は一日も光明と希望を捨てる事の出来ぬ事を示して居る。草木の光りを追ひ燕の南北に往來する、皆同一の性を示して居る。由來希望、光明、熱、活動、歡喜は皆同性のものでありて、失望、暗黒、冷靜、沈滞、悲哀は、亦同類のものであります。

思ふ、人生は決して目の子勘定で行くものに非ず。人は演劇の馬



の様に、希望なる前足が弱ければグナクとして殆見られたものではない。人は十二分の方ありと信じて、初て十分のことを爲し得るものである。だから凜として立ち、屹として進む人は、唯其人だけが立ちて居るのでなくて、希望と云ふ偉大なる人が、前から引きつゝあるのである。後から支へつゝあるのである。で此希望がなく、此の支へ手が無い人は、丁度薄氷の上を渡る人の様に、戦々兢々殆身の置場處を失ふ様である。青年は何故に鋭氣があるか、客氣と云ふ希望や、力に驅られて居るからであり。老人のくなりとして居るは、前途に何等の光明がないからである。世に偉大なる人とか豪傑と云ふのは外にさして變る所があるではないが、此希望此力なるものが偉大であるからで、基督が天下を敵としても恐れ無い、十字磔場裡尙莞爾として吾世界に勝てりと宣言するもの。迫害又迫害、攻

撃又攻撃、一人の同情を寄する人なき時にすら、保羅は曾て胸中失望の影すら見なると云ふ事である。日蓮上人の佐渡への流竄、誰か能失望なくして居らるか。吾祖大師親鸞の、京都を追はれ、北越に流され、而も悠々自若として、大師聖人若流刑に處せられ給はずば、吾亦配處に趣かんや、吾若配所に趣かずんば、何に依りてか邊鄙の群類を化せん、これ尙師教の恩致なりと云ふ、殆色駘蕩たる感話の顯はるゝは、これ實に最も大なる希望と光明とに攝取せられつゝあるからではいか。

世界の豪傑世界の偉人は、畢竟世界内の希望に導かれ、未極の力に支へられて居るのである。だからナホイオノ第一世も、遂にコルシカ島に失望の悲聲を漏らしたのである。ピスマーク公も尙最後の叫喚に落ちたのである。靈界の偉人は、世界の希望を超越して、靈界



の希望に依りて進みつゝあり、吾靈界の希望に攝取されつゝあり。究竟の希望に身心を満たされて居るのである。だから世界の希望を全く失ふ時も、尙悠々として其希望の一毫をも害せぬのである。望には無量の階級があるが、最終の希望は無量の希望、靈界の希望であければならない。げに博士ムンゲルの云ひけん如く、人生の不満足は神を求むる無言の聲なり。有限の希望世界内の希望は、遂に不満足に陥るを免れない。世界人生の希望以外に、能令速満足功德大寶海の無窮無限の希望を果たすまでは、遂に永久満足の時に至れない。

諸君、靈魂不滅を信する人は幸福じやないか。佛陀の實在と其救済を信する人は幸福ぢやないか。此世界以外に於て、佛陀と其淨土を信じ得る人は幸福ぢやないか。肉體としての吾等は尙人界に彷徨

しつゝあるに反し。靈魂は既に淨土に住み遊ぶ事を感ずる人は幸福ぢやないか。宗教は宗教意識の設定に過ぎない唯人生の心理的事實に過ぎないといふか。其は人生の一面のみを見て、人生に其が顯はるゝ所以を見ぬ人の言である。人は意識がありて心があると思ふ、何ぞ計らん無意識の心がありて意識の顯はれ来たのである。人は信仰を以て唯人心にのみ根據がありて其の形而上的靈的根據を失はんとする。其は意識を以て精神の初とし其意識自身の生ずる無意識の根據を忘るゝと同一である。

中江兆民氏は、無神無靈魂として死んで行かれた。吾は其が氏の眞摯の見解なりしと思ふ、だが何たる心細き事であらふか、何たる悲惨な事であらうか。頃日北海道の老友から其信念の喜を書ひて送りた中に、澤山の歌や俳句がありた、其中に臨終を思ふて、



飛ぶ蝶のさきは五色の牡丹島

日暮れを歌ふて

蓬萊のふもとに遊ぶ翁かな  
 噫何たる楽しい事であるか。飛ぶ蝶のさきは五色の牡丹島、蓬萊の麓に遊ぶ翁の身は頓て寶を手取にせんもの。人は最終の恐怖として失望する人生の死を、最も愉快なる幸福の棧橋とする人は幸なる哉。人は人生の怒濤に捲かれて叫喚大叫喚の苦痛に沈む時、蓬萊の麓に遊ぶと思ふ人は幸福ぢやないか。  
 噫最終の希望最終の歡喜は、唯佛を信するにある哉。

一〇 私の告白

私は時代智識に背いて靈魂の不滅を信ず、私は時代思想に反して如來の救済を信ず、私は其本願を信ず、贖罪を信ず、正定聚を信ず、後生の妙樂を信ず、たのむ一にて助け給ふと云ふ南無阿彌陀佛の大眞理を信ず。

私は南無阿彌陀佛を以て、無限の階級ある佛陀の御手元より吾等有限の世界に下し給へる唯一の眞理、救済の御手、私共の拜むべき唯一の佛なりと信ず、私は宇宙の一切を以て、此一名號に趨きつゝあるものなりと信ず。世界一切の宗教、幼稚なる希臘印度ゾロアンのミトロギーより、最も進歩せる回々教基督教まで、悉此一名號に



醇化せんとして進みつゝあるものなりと信ず。科學も哲學も、皆此意味を以て進み、文學も藝術も皆此目的を以て進む。哲學の價值ある所以、文學の價值ある所以、藝術の價值ある所以は、實に其が此現實の世を厭ふて、無限妙福の世界を或は直觀的抽象的に、或眞理の形式に依り、善美の形式に依り熱心なる欲求渴仰の情を以て憧憬を試むる所にあり。文學者にして厭世家ならずんば、これ自ら欺けるもの。哲學者にして此宇宙内に執着するならばこれ其天職を汚染するもの、苟且にするものなり。樂天的詩人とは一個の自家撞着にして、失望の極、放恣に墮落せるか。若くはサツゼスト的渴欲的の樂天觀に過ぎざるのみ。

東洋の思想は反て西洋のそれを感化しつゝあるに反し、西洋從來の思想は滔々として我思想界を風靡しつゝあるの今日、我が此の如

き頑冥の信仰を持つ、これ尙リフハンキングルが、長き睡の夢覺めて、異様なる前世紀の服裝にて、郷里に彷徨するに比すべけんか。さはれ、私共とて、血の循環する人間なり、叩けば疼痛を感じるもの。いかで時代の風潮に浮かされざらん。其思想に染まらざるべき。回顧すれば、一度は靈魂不滅を全然迷信とせり。人格的實在も、死後の世界も、全然拋棄せり。哲學に心酔せり。宗教學に沈溺せり。私自ら基督たらんとし、保羅たらんとし、釋尊たらんとし、親鸞たらんと企てたり。此壯快なる希望を持てる我は、尙奔馬の勇氣を以て前進せり。而も遂に哲學に失望し、宗教學に失望するに至れり。されば逆私強ちに深く哲學を學びたりと云はじ。宗教學を修めたりと云はじ。唯其か私の究竟の安住所たるに足ざらるを發見せるのみ。



靈魂不滅を信せず、無量壽の實利を信せず、大覺彌陀を信せざるは、今や荒涼たる沙漠の中に立つの感あり。悽寂の情濃霧の如く、我が全身を覆ひ、孤獨の感蛇毒の如く我血管を環る。人生は全たるか。將何國より生れたる。宇宙何故に存するか。彼何物に造られしか。大臣何故に貴きか。馬丁何故に賤しきか。何故に汽車は發和會議を提出するか。私は何の爲に食ひ。胃何の爲に食を求むるか。人の泣く所以。笑ふ所以。否自身の考ふる所以、孤獨悽寂を感ずるそれ自身さへ、其所以を考ふるべからざるに至れり。それども宇宙は果して迷妄か、虛無か。若迷妄なりとせば私は何故に考ふるか。宇宙何故に現實として感せらるるか。盲目的意志の

所現か。理性發展の道程か。それとも又神の造化にかゝるか。無名大極の轉化か。或は又、神の苦惱贖罪解脱の道程なるものか。

三論の一切皆空、華嚴の無盡緣起、天台の實相、真言の即事而真、理性の欲求には相應すと雖、靈の飢渴には三文の價值もなし。實相眞如を唱ふる下より、彼此我他の邪執彌深く。一切皆空の學說を味ひつゝも、腹は容捨なく饑ゑ、喉は依然として渴く。人は目的ありげに動き、猫の子まで忙はしげに走せ廻りつゝあり。

彌陀大覺世尊、私は汝に依りて始めて宇宙の意味を知れり。人生の歸趣を知れり。南無阿彌陀佛の六字、私は之に依りて法界解釋の關鍵を得たり。我が腹の空く所以を見出したり。秘は再靈魂の相續を信せざるべからざるに至りき。私は彌陀覺王の實在と救濟とを信せざるべからざるに至りき。未來淨刹の往生を疑ふ事能はざるに至



實際私は、無始以來地獄の直上にあつたのだ、吾としては、奈何にするも、生死を離るゝ事が出来なつたのであつた。罪惡も其極に至つて居るから罪惡と云ふ事を知らなつた。罪惡も其極に居るから、無力と云ふ事を知らなつた。無力も其限りに達してら、苦痛とも知らなつた。唯六道の巷を流轉々と彷徨し、今現に其境界にあり、又將に其境界をつゞけんとしつゝあるのである。私は寸毫も之を知らなつた。

漸く自分の運命に氣が附いて、地獄を免れんと思ふたけれど、善因善果の律法的宗教は、到底罪惡無力の私のたへ得る所でない。善作走急頭燃をはらふが如くすれども、總て雜毒の善と名く、又虚假の行と名く、眞實の業と名けざるなり。身口意の解行、一として眞實なる事なく、清淨なることなく、たとひ清心を起すと雖、水に描

くが如しと。これ私の眞相ではないか。こんな情けない心を持ち、身を持ち、口をもつて居る私が、どうして此教に依りて生死を離るゝ事が出来やうぞ。

他力眞宗の信仰、親鸞聖人一流の信仰は、實に暗夜の燈臺である、沙漠のオアシスである。罪惡無力の吾等、虚假不實の吾等、地獄必定の吾等を、唯本願の不思議により、如來の大慈悲によりて、やうもなく、救濟したまふとの教示である。即ち久遠實成の如來、吾等の不幸を悲憫し、一如寶海より形を示し、法藏菩薩と名告りたまひて、不可思議の四十八願を起し、其第十八の願に、吾を信じ名を唱ふることによりて救はんと言ひ給ひ、其願成就して、阿彌陀如來とならせ給ひたれば、唯此本願を信じて、一心に如來の名を唱ふれば、自然の誓約として、諸障を除き、救濟を得せしむることである。



りき、私は此に依りて韓國の生涯を捨てし所以、ゴルキーの放浪主義を唱ふる所以、ニーツエの狂せる所以、美的生活論の唱道せらるる所以、大臣の貴き所以、猫の走る所以をも解釋するを得るに至る。神話と呼ばれしもの、道話と唱へられし物、吾に於て事實となりき。頑冥の信條と云はれ、教義と呼ばるるもの、吾に於ては活動する生命とはなりぬ。斷頭場裡吾尙希望の光明を見。渴仰の情躍々として禁ずる能はざるに至る。今や胸中の空虚は満たされ缺乏は飽充され、寂寥は去り、歡喜來り、悽愴去りて安慰來る。噫これ何等の多福ぞや多幸ぞや。

今にして私は、我天賦の理性、其鋒鈍くして、所謂時代智識に背き、科學哲學に合せざる、數世紀以前の頑冥なる信仰に就て一點の疑訝なきに至りしを感謝す。

## 一一 他力信仰の獲得

私は何時も地獄の直上に立ち居る。私はどうしても地獄を免るゝ事が出来ぬ。又如來を驚かして其御助けを蒙むる事が出来ぬ。私こそは失望者中の失望者、絶望者中の絶望者、泣いても叫んでも足らぬ所の不孝者、而も此失望者、絶望者、不幸者は、他力によりて不動の大安立、大希望、大幸福を與へて貰ふ事となつた。今に至つて親鸞聖人の、五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはて、自然の淨土に至るなれど、自分の失望、絶望、不幸其物に對して、云ひ知れぬ、感謝慶賀の誠を捧げねばならぬ事になつた。



實際私は、無始以來地獄の直上にあつたのだ、吾としては、奈何にするも、生死を離るゝ事が出来なしたのであつた。罪惡も其極に至つて居るから罪惡と云ふ事を知らなつた。無力も其限りに達して居るから、無力と云ふ事を知らなつた。苦痛も其局に至つて居るから、苦痛とも知らなつた。唯六道の巷を流轉々と彷徨し、今現に其境界にあり、又將に其境界をつゞけんとしつゝあるのである。私は寸毫も之を知らなつた。

漸く自分の運命に氣が附いて、地獄を免れんと思ふたけれど、善因善果の律法的宗教は、到底罪惡無力の私のたへ得る所でない。急作走急頭燃をはらふが如くすれども、總て雜毒の善と名く、又虚假の行と名く、眞實の業と名けざるなり。身口意の解行、一として眞實なる事なく、清淨なることなく、たとひ清心を起すと雖、水に描

くが如しと。これ私の眞相ではないか。こんな情けない心を持ち、身を持ち、口をもつて居る私が、どうして此教に依りて生死を離るゝことが出来やうぞ。

他方眞宗の信仰、親鸞聖人一流の信仰は、實に暗夜の燈臺である、沙漠のオアシスである。罪惡無力の吾等、虚假不實の吾等、地獄必定の吾等を、唯本願の不思議により、如來の大慈悲によりて、やうもかく、救濟したまふとの教示である。即ち久遠實成の如來、吾等の不幸を悲憫し、一如寶海より形を示し、法藏菩薩と名告りたまひて、不可思議の四十八願を起し、其第十八の願に、吾を信じ名を唱ふることによりて救済んと誓ひ給ひ、其願成就して、阿彌陀如來とならせ給ひたれば、唯此本願を信じて、一心に如來の名を唱ふれば、自然の誓約として、諸障を除き、救濟を得せしむることである。



私は奈何に嬉しく此法に耳傾けたか。渴仰の頭を垂れ、解脱の耳をすましたか知れぬ。而も、直に解脱渴仰の境に至ることが出来で、反て、非常な疑惑と煩悶に陥ることになった。成程、如來は吾を信じ名を唱ふるることによつて救ひ玉ふと云ふ。而も名を唱ふるは、自身往生の業に非ず、唯偏に佛恩報謝の爲と思へどある。然らば吾等は奈何なる風に如來を信すれば善いか。既に他力と云ふ、他力ならば無條件に救ひ給ふとのことであらう。けれど、無條件ならば昔から助かつて居らねばならぬ。何も今さら信するには及ばぬではないか。よしそれはそうとした所で、唯助かると云ふだけでは、何處やらボカンとして、何となく間がぬけた感があり、確に救はれたりとの確信に達することが出来ぬ。若實際救はれたならば、屹度それだけの自覺がなくてはならぬ。しかるに自分には其感が起つて來ない。

して見りや無條件と云ふも可笑しなものだ。で自分は、信すると云ふこと、たのむと云ふこと、唱へると云ふことに力を入れて見た。しかしこれでは、第一他力と云ふ教へにそむくし、何程氣張りても、骨折りても、やはり不動の確信、救はれたりとの自覺に達することが出来ぬ。身を見れば露命、芭蕉の葉にかゝりて朝夕をまたす。律法的宗教はあるはあれども、機根及ばねば力はなし。而も又他力救済の信仰に逢ひながら、奈何に工夫するも開悟することが出来ぬ。吾は殆、絶望の域に落ちた、悲嘆の淵に沈んだ。斯様な絶望と悲嘆から、私は一朝にして、希望と歡喜の境に出た。私は其経過を奈何にしても考ふることが出来ぬ、説明することが出来ぬ、今に於ても理窟の上からは、條件と無條件の説明が出来ぬ。佛凡融合の契機を解脱することが出来ぬ。自力と他力の關係、



救済と信仰の關係を説明することが出来ぬ。將來は知らぬが、今日ではどうも唯不思議と云ふ外はない。失望から希望迄の過程は一足飛びである。悲嘆から歡喜迄の歷程は超躍的である。不可思議の願力の顯現である、一念頓極頓促の妙契である。

何分信仰は説明ではなくて實驗である、研究的ではなくて進一的である。凡智ではなくて佛智である。人爲ではなくて如來の願力であるから、人間の智慧からは、其關係、其理由は解釋することは出来ぬが、其精神上の經過及信仰前後の精神状態の、事實の開陳は出来ぬではない。

信仰以前の状态は、自分の智慧、意志、感情と云ふものに執着して居た。自力無功と云ふことを知らなんだ。地獄必定と云ふ確信はなかつた。如來に對して、手も届げば足も届くと思ふて居りた。凡

夫の心の中へ佛心を入れ得ると思ふて居りた。自分の信仰と——勿論如來から貰ふた他力の信仰とは思ふて居たが——如來の救済とを、交換する様に思ふて居た。随て自分の精神状態によりて、一喜一憂して居りた。救済に變動がある様に思ふて居りた。善心に執着して、悪心を恐怖した。定心を慶賀して、散心を貶斥した。未來に就て恐怖した。信仰の變動を憂へた。罪惡は落ちるが、信仰は助かると思ふて居りた。自力疑心は間に合はないが、他力信仰は役に立つと思ふて居りた——成程他方信仰、實際の他方信仰なら役に立つが、此信仰は願力と同一なものである。佛心と同一な者である。如來の御手元にありて、我方にないものである。我方になくて、我所有物である。我方になくて、我方にあるものである。實に不可稱不可説不可思議圓融圓滿の大信仰である。——自力無功と思へば、自力有功と



思ふて居りた。地獄一定と思へば、往生一定と思ふて居りた。罪惡深重と思へば、罪惡は無くなると思ふて居りた。要するに、自分と云ふものに執着し、我と云ふものを離るゝことが出来ないで、胸の中には妄念が充滿して居りた。

他力の光明に照らされて見れば、自分は絶對的に罪惡者である。罪惡者と思ふても思はひでも。自分は絶對的に無力である。無力と思ふても思はひでも。自分は絶對的に、地獄一定である。地獄一定と思ふても思はひでも。自分のものは、智慧も、感情も、意志も、根本的に空虚である、妄念である、怯情である。善心も間に合はねば、惡心も間にあわない。定心も間に合はねば、惡心も間に合はねば、疑惑も間に合はねば、信仰も間にあはない。今までは如來に對して、手も届く聲も達すると思ふて居たが、今では、自分は罪惡、無力、

空虚の團塊となりて、地獄の闇底に立つて居るのでありて、如來は高く／＼九天の雲に隨れて、呼ぶことも、祈ることも出來ぬこととなりた。自分は未來に就ては、泣くことも、叫ぶことも、悶ゆることも、憂へることも、全く無用のこととなりた。全くそんな氣の利いた方も、權利も、資格もないこととなりて了ふた。一言に云へば、地獄一定、自力無功、思案空虚、無有出離之縁となりて了ふた。

地獄一定、自力無功、思案空虚、無有出離之縁と云ことが、これが私の真相でありた。これが私の眞價値でありた。不變の價値、人類共通の價値でありた。これ如來救濟の正目的でありた。法藏因位の所觀でありた。永劫修行の唯一對機でありた。十劫正覺の隨喜讚仰者でありた。南無阿彌陀佛の六字を受くべき第十八願正定聚の機でありた。我爲の因位思惟、我爲の永劫修行、我爲の十劫正覺、我



爲の名號成就、我爲の四十八願ならば、其吾は、罪惡深重、地獄一定、自力無功、思案空虛、信する力もなく、たのむ力もなく、喜ぶ力もなく、いや信じても、無駄、たのんでも無駄、喜んで無駄のものだから、何にも思はず、せず、考へぬ、地獄一定、自力無功、思案空虛、罪惡深重のまゝで助かるよりしやうはないのである。救はるゝより仕方がないのである。往生するより仕方がないのである。我が心によらぬ救済であるから、我心によりて狂ふ道理はない。我心によりて狂はぬ程のものなら、他人の心によりて狂ふ道理もない。他人の心によりて狂はぬ程のものなら、聲聞でも、菩薩でも、化佛でも、報佛でも、狂はず力は又勿論ないのである。私の生命は、如來の掌裡にあり。私の救活は、如來の方寸に存在するのである。一たび自力無功、思案空虛を自覺してからは、私はまことに閑散

である。妄念によらぬ信、心によらぬ往生だから、心は奈何に狂ふても、心の所理は寸毫もいらぬ。妄念は奈何に荒みても、妄念の所置は必要がない。心は心に任せ。妄念は妄念に任せ。往生の大事は一に唯如來の大心に任せ奉りて、手を出すに及ばぬのである。小人閑居して不善をなす。こう閑散では困ると思ふて、私には念佛と云ふ往生の仕事を、正定業と與へて下されたのである。だから私は何の心配もせずに、念佛するだけである。

念佛して地獄に落ちたら何とする。そんな心配は一切皆無である。自力無功、思案空虛の身は、初から地獄一定である。自餘の行をばげみて佛になるべかりける身が、念佛して地獄に落ち候はゞこそ、すかされ奉りてと云ふ後悔も候はぬ。いつれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。我手で行かぬ未來、何方にし







### 一二 他力信仰者の自信

「故聖人のおほせに、源空があらんどころへゆかんとおもはるべし、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりども、故聖人等が常に拜誦する執持鈔の文あり。讀む人も平然として讀み、聞く人も平然としてきく。これ此文のあまりに平然たる語氣なるが爲なるべしと、噫これ何たる大言ぞや。これ旗鼓堂々億兆の軍兵を引卒する大元帥の號令に非ずや。永劫の冥暗に對する凱歌の聲ならずや。永劫の道や、那のアルプスの險を事ともせざる英雄ナポレオンも、らすや。故聖人のおほせには、源空があらんどころへ行かんと思はるべしと、噫これ何たる大言ぞや。これ旗鼓堂々億兆の軍兵を引卒する大元帥の號令に非ずや。永劫の冥暗に對する凱歌の聲ならずや。永劫の道や、那のアルプスの險を事ともせざる英雄ナポレオンも、

此險峻に對して戰慄せり。朝鮮八道を蹂躪し、支那四百餘州を併呑せんとせる豪將豐太閤も、懼然として此道に向へり。宇宙を自己方寸の胸に縮め、偉大なる宇宙觀を構成せる幹圖も、支那四百餘州の光明となり、餘光日本に及び、能幾億の人衆の道義的中心となれる孔夫子も、尙以て難しとする所の永劫の道に望んで、淨土宗の人は愚者になりて往生すと云ひ、念佛の外何事をも知らずと云ふ十惡愚痴の法然坊は、平然として此至大の聲を發す、豈驚くべきに非ずや。若世に、至深至大至尊至高の聲ありとせば、圓光大師の此宣言確に其一ならずや。此平然たる一語は、實に親鸞師父をして、たとひ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへまゐるべしと思ふなりとの金剛の確信を與へたるに非ずや。見よ此一語又奈何に數百の門生に不動の確信を與へたるか。永劫の黒闇に惶怖しつゝある當時の



道俗に、赫々たる光明を與へたるかを。否此一語は、實に世界億兆の民衆、法界恒沙の群生が、等しく敬聽渴仰すべき聲なり。無量衆の生命懸りて此一語にあり。

此一語はこれ億兆救済の至言なりと共に、又實に宗教家其人の眞偽奈何を決定すべき試金石なり。奈何に八萬の法藏に通ずるも、此一語を吐く能はずんばこれ物識屋のみ。奈何に東西兩洋の宗教に精通するも、此一語を云ふ能はずんばこれ學究先生のみ。たとひ一文不智の輩なりとするも、能此確信ありとせば、これ世の至大なるもの、一、眞なるもの、一なり。今の世誰か此宣言を發するものぞ。

### 一三 他方信仰者の感謝

師父親鸞聖人云く、彌陀の五劫思惟の願をよくく案すればひとへに親鸞一人が爲なりけりと若それ理論より云はれ、法藏菩薩因位の發願永劫の難行、何ぞ親鸞一人の爲ならんや、因願に十方衆生と誓ひ、成就に諸有衆生と云ふ、聖人豈之を知り給はざらんや、而も信念の極は實に此の如くなるに至る、豈法藏因位の發願修行のみならんや、淨土建立と云ふも、名號成就と云ふも、光明攝取と云ふも、罪惡消滅と云ふも、功德廻向と云ふも、信心獲得と云ふも、明信佛智と云ふも、疑惑を滅しむる所以、難行を捨てしむる所以、餘行を廢する所以、念佛を勸むる所以、實に親鸞一人の爲なりけり。豈實



にこれのみならんや、番々出世の諸佛、八萬四千の教法、天竺支那  
 日本に於ける、大小二乘顯密の法門、馬鳴の出づる所以、智者の學  
 ぶ所以、賢首の教ゆる所以、龍樹の説く所以、皆唯親鸞一人の爲な  
 り。儒教と云ひ揚墨と云ひ、朱子と云ひ、神道と云ひ、婆羅門の所  
 説と云ひ、外道の説く所と云ひ、更に之を大きく云へば、法界一切  
 の法、雀の鳴く所以、獸の走る所以、宰相の國務を整理する所以、  
 小學兒童の學校に通ふ所以、皆親鸞一人が爲なりけり。  
 豈親鸞一人の爲ならんや。親鸞一人出で、一切を活かしたるなり、  
 親鸞は法界の中心なり焦點なり活ける法界なり親鸞若此信念の堂奥  
 に達せずんば、四十八願は一種の説話に過ぎざりし、法藏因位の願  
 罪は一種のミトロギに過ぎざりき、光明攝取と云ふも名號成就と  
 云ふも、明信佛智と云ふも、罪惡消滅と云ふも解脱と云ふも、救濟

と云ふも、難行と云ふも易行と云ふも唯一種の言語に過ぎざりき、  
 文字に過ぎざりき。親鸞立つて法界始めて動き、親鸞歡喜して法界  
 初めて其目的を達せり。愚禿釋の親鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利  
 の大山に迷惑し、小慈小悲もなき身にて、姦詐もはし身に充つる、  
 四大海の水を以ても洗ひ難く、却盡の火を以ても焼き難き、汚穢不  
 淨虛假諸僞なるわれ親鸞、今本願の業力に依りて、法界を背負ふて  
 立つの身となれり。宇宙一切の目的を活現せり、歴史發展の意匠を  
 實現せりと、これ聖人自身の衷心の信念ならずや、  
 云ふ勿れこれ理論のみ推論のみと、理論にても推論にても、本願  
 信する吾等には、實に此の如く思はざるべからざるなり、聖人豈つ  
 どめてかく思ひ給はんや、唯内に個々たる光明を見、殊妙の光景に  
 接し、左顧右盼、謙恭推讓の極、而も尙此大なる宣言として顯はれ



た○る○も○の○。吾○等○嘗○て○聖○人○の○此○告○白○に○對○し○て○、其○心○理○的○不○可○能○を○主○張○  
せ○り○き○、而○も○吾○今○に○し○て○一○點○の○疑○念○を○挟○ひ○餘○地○な○き○に○至○れ○り○。  
科學哲學は畢竟萬物の客觀的研究なり、分析的研究なり、未明よ  
り黄昏まで、吾等パンの製造法を學ぶ、空腹依然たり、飢渴醫すべ  
からず、而も何事をも知らざる懷の赤子、滿腹飽充、愛の床にすや  
くと睡むる。

吾は世の哲學者に謝す、宗教學者に謝す、彼等は世界に於ける最  
大利他主義の人なり、同情博愛の人なり、毫も自己の飢渴を憂へず  
して、一心にパンの製造に従事し給ふ、吾等何を以て彼等の徳を頌  
せんか、其功を表すべきか。  
懷○に○睡○む○る○昏○々○た○る○赤○子○、贈○々○た○る○恩○魯○、吾○等○パ○ン○に○就○て○其○名○も  
知○ら○ず○、ま○し○て○其○製○造○法○を○や○、而○も○吾○等○は○終○始○腹○ふ○く○れ○て○毫○末○の○飢

を○覺○わ○す○、見○る○も○の○聞○く○者○、天○地○法○界○一○と○し○て○我○物○な○る○を○疑○は○す○、  
哲○學○者○の○眞○理○も○、藝○術○家○の○美○も○、道○徳○家○の○善○も○、宗○教○家○の○神○も○、聞  
け○ば○こ○れ○我○爲○と○知○り○、見○れ○ば○皆○我○爲○と○喜○ぶ○、吾○又○何○等○の○多○幸○ぞ○や○龍  
兒○ぞ○や○。



## 一四 親鸞聖人の教示

私共が一たび生死海に流轉してより、茲に苦惱と罪惡とを感じ、再真如の本源に還り、寂靜の法樂に證入せんとして、あらゆる方面に其心血を注ぎ、其努力を試みた。此法界的煩悶は彼等を驅りて、或は哲學に行かじめ、藝術に行かじめ、宗教に行かじめ、道徳に行かじめ、沈思的冥想に行かじめ、社會改良に越かじめた。思ふに世界人類の營々たる事業は、其直接と間接とを云はず、其方便と目的とを云はず、其意識と不識とを問はぬならば、畢竟此神聖なる宇宙的煩悶に驅使せられたものに外ならないのである。

かく、人類は往古より此目的に勤め、此煩悶に驅られつゝ、而も

此目的を滿たし、此煩悶に報ゆる道を發見する事が出来なんだならば、否發見せらるべき道其物が無かつたならば、これ人類にとりては由々しき大事である、悽慘の極である。勿論或一派の人々の様に、「然り吾等も其欲望は無限である、が此欲望は欲望のみでありて、滿たさるべきものでないから、かゝる事を夢想するは要なき事である。吾等は唯自己の爲すべき事を爲し、自己の受くべき事を受けて、靜に最後の床に斃るれば充分である」と、斷然勇らしく思ひ切る事が出来るならば、或は由々しき大事でないかも知れぬ。悽慘の事でないかも知れない。が私共は不幸にして能く此斷乎たる決心に至る事が出来ない。生の從來する所を考へても私に於ては分らない。死の趣向する所を考へても、私に於ては黑暗々である。だから私共は、此瞭々たる過去、黑暗々たる未來に就て、明了なる解釋を見出さな



い間は、到底或人々の様に満足は出来ないのである。否當に悲惨な死を遂げねばならない。

此解答に就ては、世界幾多の偉聖、特に近く親戀聖人の解釋は、最も私に満足を與へ給ふから、私は之に依りて自ら解釋して居るものである。然らば私共は、奈何にして再興如の本家、若世間の語で申すならば、實在界絶對界無限界に遠る事が出来るかと云ふに、茲に過去永遠の昔より、私共人類の前に開かれたる自然法爾の大道がわかる。此道は宇宙一切の人類の等しく趣入すべき道でありて、法界唯この一道しかないから、これを大道と云ひ。又此道は決して釋尊の考へ給ふものでもなければ、基督の製造せられたものでもなく、又人類の宗教意識が、徒に空想作爲したものでもなく、本來法爾法然として、人心の奥底に誓はれて居るから自然と云ふのでありて、

過去の宗教的天才が、幾多の代表的煩悶に依りて、之を發得し之を發明して、私共人類の前に種々の形式を以て之を示し、かくて私共自身の心奥に誓はれてある此大道を知らせんと勤められたのである。其自然の大道と云ふは何であるか。云ふまでもなく信仰に依りてのみ救濟せらるゝと云ふ事。尙更に歩を進むれば、信仰と救濟と一體、と云ふ事でありて、佛教各宗が等しく用ゆる所の、南無阿彌陀佛の御名に依りて、代表せらるゝ所の不可思議の眞理である。

此眞理此大道は、既に人心の奥底に誓はれてあるもの故、奈何なる人も修養啓導其宜しきを得れば、自然に開發し得るものであるが、しかし自ら之を開悟するには、非常の煩悶と、至誠と、天才とを要するものであるから、私共平凡の人間は、寧ろ過去の宗教的意識が既に發見し、天才偉聖が到達した實驗の跡を追ひ、教義の軌を慕ふ



て、之に到達するを最も簡易なる方法とするのである。しかし其何れにするも、此大眞理に到達し、此大道に證入しやうと思ふならば、非常なる至誠勇猛の決心がなくてはならない。

世界幾多の宗教は、皆此目的に向ふて進み、此目的を果遂しつゝあるのだから、何れの宗教も、遲速の差異こそあれ、遂には等しく此大眞理に到達するのである。猶太の宗教はイエスによりて初て此自覺に達し、保羅によりて彌明了のものとなり。オーガスタンヤル一テルによりて殆完備せられ。亞刺比亞の宗教はマホメットの自覺によりて初めて此種の曙光を見出したが私は我が親鸞聖人及蓮如上人に依りて教へられたる淨土他方の教義こそ、世界に於ける最も殊妙圓滿ある眞宗教であると思ふ。私は之に依りて此自然の大道に入り、又幾多の人々と共に、那の法性の源底に達入したいと思ふので

ある。

斯様に此眞理を自然の大道、法爾の眞理と申せば、人間の思想の習慣として、唯火の熱きか如く水の冷なるが如く、春の後に夏來り、日の前に暗去るが如く、何等特別の意義を見出す事が出来ないが、之は大なる誤謬でありて、此自然の大道こそ、蓋十方無碍光如來の不可思議の大本願、大悲心の廻向し發願し、誓はせられた涙と血との痕でありた。無明の大夜をあはれみて法身の光輪きわもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現して下された、其佛の本願でありた。久遠實成の佛陀が十方衆生救済の大願を起し、不可思議の思惟と、修行とに依り、酬因感成し給ひたる一佛乗でありた。大無量壽經に説かせられたる如來成道の因果は、決して一場の神話でもなければ、詩的空想でもない。此森嚴堂々たる法界の一大實蹟を、吾



々人間に簡易明了に啓示し給ふたもので吾等は此如來の發願と修行

によりてのみ救濟せらるゝものである即此如來の發願と修行が私一人の爲に爲されたものであると云ふ事を信する事によりてのみ救はるものである。保羅やルーテルは此法界的一大實蹟を現實の史上の人物たる耶蘇の社の上に擬したものに過ぎぬ。そは免まれ吾等は實に此如來の永劫の間に發されたる本願と修行とにより遂に成就せられて宇宙人類の精神の奥底に刻まれたる此自然の大道を發見し此大道に一致する事によりて初て永劫の安立に住する事となりた依て吾等は此自然の大道の根本たる如來の本願修行即衆生救濟の計畫に就て少しく述ふる所あらんとす。

## 一五 如來救濟の計畫

如來が私共を救はんとの希望を起し、什麼の計畫と準備とを取り給へるか。此を知得する事は、私共が如來に救はれ奉る所以なると共に、又宇宙人生の眞意義、眞相を領解する所以である。

如來救濟の計畫は、從來出世せられたる宗教的天才によつて、種々に發揮せられてある。保羅や、ルーテルによりては、信愛望として、律法教、信仰教として。ソクラテスやプラトニーによりては、人智迷妄の悟達として。孔子によりては人事を盡して天命を知るとして。老子によりては無理を去りて自然に復歸すとして。其他種々の人々によりて種々の方面に發揮されつゝある。然し、此宇宙の上に、



特に痛切に吾人の精神上に、日々實驗感應する如來救濟の大計畫を、最も要領の得て、私共の實驗を最も善く指導するものは、「大無量壽經」に顯れたる、如來成道の發願、即四十八願の施設である。

從來歴史家の間には、大乘佛說非佛說の問題が盛に討議せられ、隨て『大無量壽經』の如きも、廿九出家三十五成道、八十入滅の橋多摩悉達の説教でないとせられておる。それ或は然らん。而も私共が此『大無量壽經』に説かれたる如來成道の因果を信するに於ては、さしたる累を受けぬ。そは此成道の因願の如きは、私共が此經に説かれたるより尙一層精緻に、尙一層切實に、實驗感應しつゝあるから、かゝる史上の是非によりて、動搖を感ぜざるは固より、かゝる深遠奧妙の宇宙人生の大秘奧を先聖から何等の暗示指導を受けずして此『大經』説者が、かく迄明了に之を實驗し、之を説示せられた

かに就て、衷心よりの感謝と、信仰とを捧げざるを得ない。隨て此『大經』を説かずして、特に四十八願を説かずして、單に諸法無常、一切皆苦、四諦三道をのみ説ける悉太太子は、さして私共が尊敬渴仰に値せぬもので、反て無名の大經説者こそ、私共が衷心より尊敬感謝し奉る釋迦佛である。私共はこの説者を五濁の凡愚を悲みて、此世に應現せる彌陀の化現、釋迦大覺世尊として鑽仰し奉らねばならぬ。

私は往時、真理の存在を疑ひ、宗教の眞價を危み、悟性を以て如來の救濟を思索し、開祖親鸞聖人を侮り奉り、大聖釋迦牟尼を瀆し奉りつゝありし折、私は、信仰の成立とか、平安の到來とか、或は律法によりて義とせられず、唯愛によりてのみ、自力をすてしのみ、自然に皈してのみ、義とせらるゝと云ふが如きは、唯人間精神の自



然の規約、自然界の自然の法則、思想の法則として、論理學として吾等に知らるゝ其根源の規約のあるが如く。自然界を支配するに、數理學若くは科學上の法則と云はるゝものゝ根原の規約のあるが如く。感覺の範疇として、吾人が自然界を覺知するに、時間空間の範疇と稱する規約あるが如く。其他男女相戀の精神法則、親子相愛の心的規約の如く單に人間精神の一面に於てのみ、さる規約を有するに過ぎないと信じておつた。また如來の發願、如來の誓設と云ふが如きは、單に一種の神話の宗教的事項と結びついたりるものに過ぎずとなし、信仰の精神状態だけが、何等特別の神秘的着色を有せぬ爲に、唯これ人間精神自然の規約として、宗教的恐怖心を慰安する一種の精神的安慰法、即胃に對して飯、肺に對して空氣、渴に對して水のある如きものとのみ思ふて居つた。

が、一度人間智識の價値を知りし以來。宇宙に對して凜然襟を正すに至りし以來。人間至深の要求に價値を認めし以來。親鸞聖人、蓮如上人の教示が、着々心靈にて玩味せらるゝを得るに至りし以來。哲學は眞、宗教は妄の見地から、更に哲學宗教の二重眞理に進み、更に哲學妄、人智妄、宗教獨眞、信仰唯實の見地に至りし以來。自分は今まで如來の本願を疑ふ所の理由たりし此自然界精神界の法則、即信仰によりて救濟せらるへしと云ふものと同様式の法則の、宇宙間至る所に存在する事。即ち水の心を知りて、水に任すれば、怒濤の上も尙は壘の上に在るが如しとか。傲慢慳貪無情の老侯爵も、純潔優愛の小公子の前には、慈悲博愛の老祖父と變ずると云ふが如き、自然界精神界の法則が、如來本願の否定の條件なる能はざるのみならず、寧ろ此法則其自身の存在が、當体即ち如來本願の誓設、



如來遍照無碍の大光明、大智慧、大慈悲、大願力なる事を信せざるを得ざるに至り。親鸞聖人の光明は十方微塵世界にみち／＼たまへりと、のたまへる實驗を、七百年後の微弱不徳の末第否末第と云ふだに價せざる末第に、歴々實驗する事を許容し給ふた。

勿論如來の本願は、要するに無善無力無智の吾々を、生死流轉の凡夫地より、常住不變の大覺位に救済せしめ給ふ事なれば、昇道人を救ひ給ふにも、實に昇道救済に要する一切の計畫手段を悉くた盡しにあらねばならぬ。昇道若印度に生れんか、印度的に導くの要あり、昇道若半開の世に生れんか、半開的に導くの要あり。昇道若得意の境にあらんか、如來は之を利用せざるべからず。若病に惱まんか、又直に之を善用せざるべからず。富豪の子たる時は富豪の子の如く、顯貴の主たる時には顯貴の主の如く、彼怒る時、彼喜ぶ時、

彼演説する時、彼書を著す時、十劫以來隨時隨處に、如來は一念一刹那も、利用善巧の目を離すなく、開發啓導の手を止むる事なし、「いかばかりお手のかゝりし菊のはな。」釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便したまふ如來因位の救済計畫は、一人々々に對して、盡未來際の末まで起るべき、生すべき境遇出來事、精神現象、一念の妄心、一座の事項をも悉く透觀して、此に對する善後策を畫し、干涉善巧止み給はされば、如來救済の計畫は、實に各個人の委すべき一切計畫なれば、此點より云はゞ、實に其計畫は量り奉ることは出來ぬ。唯吾には日に自ら實驗玩味して、其鴻圖の偉大巧妙、其勞力の周到飾密なるを鑽仰感謝し奉る外はないが、若吾々凡夫に對して、普汎なる、共通ある救済計畫を尋ね奉れば、我聖人開山の示し玉ふ、四願六願、八願、とあるものならんかと奉信し奉るのである。



- 今簡單に如來の此普汎なる計畫を讀し奉るに、
- 一 如來は其御身を飾るべく又吾等の希望を知らしめして、初に智慧の相なる光明無量の願を立てたまへり。
  - 二 如來は、其御身と共に、吾々生命無限の要求に答ふるべく、無量壽命の願を建てたまへり。此二願に答へて、如來は永恒遍一切の大覺となりたまへり。
  - 三 如來は吾等が、罪惡、有限、束縛、無常、苦惱の肉體と世界とを厭ふ事を知らしめして、純淨、無限、自由、常住大樂の無量光明土を此迷へる宇宙の外に立てたまへり。
  - 四 如來は、吾等を救ひ給ふ唯一の方法として、他方信仰、即如來の救済と同體異形なる絶對的他方信仰を成就し給へり。
  - 五 如來は、此信仰を吾等に與ふる爲に、佛凡交通の道を開くべく、

南無阿彌陀佛なる御名を成就したまへり。

- 六 如來は、如來の成就せる一切を六字の御名に含め、此御名を稱する事を以て、人生唯一の本務と定めたまへり。
- 七 如來は、吾等が如來の世界に生れたる後、又同胞を救済する爲に、此界に生れ還る事を許し玉へり。
- 八 如來は吾等を救済する第一手段として、善惡因果の報償原理と、主我擴大の盲目的意志に支配せられつゝある、争鬭呵責正義の世界に、慈悲寛容の仁愛原理と、無我歸佛の向上的意志とを彰して、横に森羅の諸法、豎に歴史の對象物心兩界、時間空間、一念一法に、遍く靈的旨趣を封し、優勝劣敗、業道不改の世界を、衆生訓練啓發の道場と改めたまへり。

九



十.....。

如來の本願の、吾等が日常實驗し奉る所を列舉せば、一々枚舉に遑あらずと雖、吾等が如來救済の大目的に順應しまつらんには、即如來に救はれ奉らんには、以上の本願を以て、否私が第四に擧げたるもの、即『大經』に第十八願に擧げられたるもの、即唐の善導、日本の源空等によりて、念佛往生の本願と唱へられ、我先祖親鸞聖人によつて至心信樂の願と云はれ、蓮如上人によりて、たのむものを助ける願と願はされたるものを以て缺けたる所がない。且此等の本願の宇宙に遍備奢設せられたる事を、一々實驗識知するに於ても、又唯奈何にして救はるべきや、奈何にして安立せらるべきやの唯一解答なる第十八願を信じ、此第十八願によりて自ら如來に救はれまつりて、後如來は此公開默示たる一々の計畫を切實に吾等に味識せし

め給ふのである。南無阿彌陀佛。



## 一六 蓮如上人の信仰

總て内包の少いものは外延が多く、内包が多くなるに隨て外延の減すると云ふ事は、常に論理上の法則ばかりでない。同じく中心の信念を表白せられたる鑄型ではあるが、法然上人の念佛して往生を遂ぐるこの信條と、蓮如上人の後生助け給へどたのむ一で助かるこの信條とは、外延と内包とに大なる相違がある。

勿論、法然上人の唱ふる一で助かると云ふ信條も、蓮如上人のたのむ一で助かると云ふ信條も、言葉に顯はれた上こそ若干の相違はあるが、若兩上人の根本的實驗の上には、一點の相違もない。唯不可説の妙味を、或は唱ふる一と云ひ、たのむ一と云ふたものである。

云ひ易ゆれば、無條件と條件との調和融合せる救済の自然の經驗を、一は稱名に依りて顯はし、一はたのむに依りて顯はしたもので。法然上人に於ては、稱名か無條件と條件との調和せる行、蓮如上人に於ては、たのむが無條件と條件の融和せる信である。だから此最本最深の實驗を表白し給へる法然蓮如兩師の信條を見て、素樸的之を解釋して法然上人は念佛さへ申せば往生するとあり。蓮如上人は佛助けたまへとたのむ一で助かるとの仰と合點しても、こは兩師の信仰を去る數萬里も管ならざるものである。常に此等の信條に限らず、總て宗教上の教義は、皆奥深き實驗の表白であるから、堂に入りた事のない人が、局外から檀に解釋せんと思ふても到底正鵠を得る事はむづかしいと思ふ。

かく兩上人の同一信念の異りたる表白ではあるが、法然上人の信



條は、其表面上、内包が少いから、隨て外延が多い。言を易ゆれば、其信條が表面上尤大で、曖昧で、朦朧として居るから、西山も、鎮西も、淨土も、眞宗も、何もかも皆造作なく容れて了ふ。道を求むるの士が、第一に念佛往生に其安住所を見出し、嘆異抄の、念佛して彌陀に助けられまいらすべしと、善き人のたほせを蒙りて信する外に別の仔細なしとの法文に隨喜するの、此が爲である。しかし法然上人の眞の念佛往生は、求道の士が其出發點に於て、嘆異抄を解し、念佛往生を解したるものとは決して同一のものではない。若仔細に其信條の内包を敷へ來れば、是非とも蓮如上人のたのびるのを助けるの信條に至らねばならない。

蓮如上人の信條は、其内包が極めて多いただけそれだけ外延が狭い。法然上人の上には、眞實報土の往生も、假土解慢の往生も、皆混然

と許してあるが、蓮如上人の信條には、唯眞實報土の往生の方規の外は許さない。蓮如上人の信條は、簡潔で明了で、些の曖昧も許さず、些の假籍も許さぬのである。西山鎮西の異流は勿論、同じ眞宗の中でも、法体に偏する十劫秘事も許さず。意業に偏する口稱慕り能機たのみも許さず。雜行も嫌ひ、雜信も嫌ひ、自力も嫌ひ、一切の妄情計度を悉く拂ひ捨てるのである。これ念佛往生の前に立ちては、容易に領解せりと思へる求道の士が、蓮如上人の信條の前に立ちては、躊躇逡巡煩悶悞惱して容易に之と一致する能はざる所以である。

蓮如上人の信條は、八十餘通の御文毎通に顯はれて居る。其所詮は一言で盡きて居る。しかし此一言で盡きて居る上人の信仰は、淨土他方教の信仰の肝腑であると同時に、又宇宙一切の宗教の中心で



ある。釋尊も此實驗がなければまことに可愛想なものであり、基督も此意識がないならば墮獄の罪人たるを免れない。これ眞理の樞軸、宇宙の基本である。十方無碍人唯此一道よりのみ生死を出で、前佛後佛唯此一門のみより涅槃の彼岸に至るのである。

其一道一門とは、即御文各通に顯はるゝところの六字の謂即南無阿彌陀佛なる御名の眞意義である。一言に云へば、たのむ一で助かると云ふ事である。たのむものを助けると云ふ事は、文字も簡單平易で、何でもない様に思ふけれども、蓮如上人の宗教的天地は、全く此唯一關鍵によりてのみ開かれ、解釋せられたものである。

宗教無功と、宗教無用とは、大乘佛教の免るべからざる根本的矛盾である。本來成佛ならば、觀道修行の必要なく、本來佛でないならば、何時の時に佛果を成する事が出来やう。此は單に承陽大師

の疑問たるばかりではない。我他方救済の教に於ても、若全然無條件に救はるゝとすれば、御助けはまるきり無要となり、條件の下に救はるゝとすれば、我等は到底之を信受する事が出来ないで御助けは無功となる。蓮如上人は、此たのむものを助けるの衷心の實驗に依りて、此根本的矛盾を調和し、無條件と條件とを圓滿に融和解釋せられたのである。

親鸞聖人は、大經及諸經の教示に依りて、南無不可思議光なる久遠寶成の佛が、世饒王佛のみもとに於て、超世稀有の大願を起し。其一々の願に、三信十念に依りてのみ救はると誓ひ。又凡夫の往生と、自己の正覺とを一體に願はせられ。而も十劫の曉天に其願滿足し給へりとさく。されど我等は之を一個の神話として、譚として外は考へる事が出来ぬ。しかし蓮如上人は、此たのむものを助ける



の衷心の實驗に依りて、明白の事實として之を信知せられたのである。

我等は、觀無量壽經に、光明遍く十方世界を照らして、念佛の衆生を攝取して捨てたまはずの文や、彌陀經に、彼佛の光明は無量にして、十方の國を照らすに障礙する所なし、此故に號して阿彌陀とすとの文や、更に此二文を取意して、親鸞聖人の和讃に、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取して捨てざれば、阿彌陀と名けてまつるの文やは、唯漠然たる詩的想像か、理論的類推を以て、附會的解釋を施すの外には、之を認むる事が出來ない。蓮如上人は、此たのむものを助くるの活ける衷心の實驗に依りて、之を明了に觀照せられたのである。

佛の本願、唯念佛の一行を攝取し、三信の信仰のみを撰擇し。恒

沙塵數の如來、又万行の少善を嫌ひて、名號不思議の信心のみを等しく偏にすゝむると云ふ事も、上人は此活ける實驗に依りて、圓滿に解釋せられたのである。

奈何なる人も安ずる能はず、奈何なる工夫も満足せしむる能はざりし未來永劫の生命の死活を、目見ず、手觸れず、心に考ふる能はざる實在に、要もなく打任せて、金剛堅固の大安心に住する事を得られたのも、唯此活ける衷心の實驗に依られた爲である。

他宗には、名號よりは繪像、繪像よりは木像と云ふ。當流には、木像よりは繪像、繪像よりは名號と仰せられたのも、又南無の字は聖人の御流義にかぎりてあそばしけり、南無阿彌陀佛を泥にてうつさせられて、御座敷にかけさせられて、仰せられけるは、不可思議光佛、無碍光佛も、この南無阿彌陀佛をほめたまふ徳號なり、しかれ



ば南無阿彌陀佛を本とすべしと仰せ候なりと。六字を以て信仰の中心本體とせられたるのも、唯此活ける衷心の實驗に依られたのである。

番に此等二三の問題に止まらず、蓮如上人の心靈的殿堂の全景は、全く此一句の實驗に依りてのみ解釋せられたのである。之はあながち蓮如上人に限らない。親鸞聖人もそうである。法然上人もそうである。天親菩薩も、龍樹菩薩も、又大聖釋迦牟尼もそうである。若此中心の大道が認められぬならば、此自然の一乗が證られぬならば、到底永劫の安心は望まれないのである。

そんなら、たのむものを助けるとは奈何なる事かと云へば、吾等凡夫の一切の計度力行を捨て、全く佛の大慈悲に憑托すれば、頓て其攝取の光中に救はるゝと云ふ事である。若一步其論を進むれば、

吾等が眞に其力行工夫を捨て、佛の大悲に憑托したのが、即佛の攝取にあづかつたのであると云ふ事である。即佛の慈悲に憑托したと云ふも、佛に救はれたと云ふも同一事實であると云ふのである。而して其一念のたのむなり、助かるなりの心が、これ我等の心にして佛心、佛心にして我等の心であると云ふのである。此状態に於ては、佛智佛徳全く我に満ち、我亦佛智佛光の中に攝融せられたのであると云ふ事である。

蓮如上人の南無阿彌陀の意義と云ふは、此たのむ一で助かること云ふ事と、更に此中に含む所のたのむ即助かるの機法一體と、此一念の心の佛凡致一融合の妙味とを顯はす佛凡一體との意義である。而して其南無阿彌陀佛の體とは、實に此六字の意義を、我等が上に實現した所を云ふのである。



で、機法一體佛凡一體は、たのむものを助けるの中に自然に含有  
 圓具する義でありて、これなくんば眞のたのむ助けるの領解せられ  
 たのではない。故に六字の謂を一口に云へば、唯たのむ一で助かるど  
 云ふ事更に之をついめて云へば唯たのむ、唯助かれと云ふに外なら  
 ないのである。

蓮如上人の信仰は、實に唯たのむ唯助かれと云ふのである。改悔  
 文に其信相を述べて、もろくの雜行雜修自力のこゝろをふりすて  
 、一心を阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生御助け候へとた  
 のみ申して候と云ひ。其往生の覺悟を述べては、たのむ一念の時、  
 往生は一定御助けは治定と存じと云ひ。其報謝に就ては、此上の稱  
 名は御恩報謝と喜び申候と。これ眞信仰の摸型である。

特に私の感謝にたわれぬのは、普通南無阿彌陀佛と云へば、イ

ヤ第十七願成就たとか、佛の御手元にあるものだとか、何とか、か  
 とか云ふて、非常に神秘的な、奥床しい物の様に云ふて居るのに、  
 蓮如上人は特に四帖目第十一通に、抑南無阿彌陀佛の體は、すなは  
 ち我等衆生の、後生助けたまへとたのみ申心なりと。南無阿彌陀佛  
 の六字の本體、活ける南無阿彌陀佛とは、我等が自己の力を捨て、  
 一心に佛に憑托した、其心こそ即それなりとの、明快痛切なる御化  
 導である。

吾等は此蓮如上人及其師祖親鸞聖人の教示により南無阿彌陀佛の  
 堂奥他力信仰の極致に至らん哉。



## 一七 信仰と智情意

信仰は主觀的事實なりと云ひ、又信仰の精神状態を分析して、宗教的理性、意志、感情と云ふ様に説明するものであるから、ともすると純他方の信仰、絶對安立の信仰を以て、吾々の精神に根底を有するが如く解せられ、何か神秘的な精神状態にでも達せねば、眞信仰ではない様に解せらるゝに至りては、眞に残念な事である。奈何にも信仰は實驗上の事、心靈上の應諾で、學者が何と云はふが、認識が承知致すまいが、動かすべからざる衷心の經驗であるから、主觀的事實と云ふも善い、又其精神状態を、智情意に分析するも善いけれども、さればとて信仰の根底が、吾々の情意の上にある、主觀

的のものであると思ふたら、大へんな謬見でありて、かゝる信仰は、決して究竟の信仰でなく、隨て不動の安立を與ふるものではない。

全體、吾々の精神は何程の價值があるか。奈何に微細な認識でも、奈何に高尚な感情でも、奈何に強烈な意志でありても、唯これ、有限、迷妄、虛無の團塊ではないか。有限のものを奈何に集めても無限にはならない、迷妄を何程重ねても眞實にはならない、空虚を何程磨いても實質は出て來ない、それを吾々の分別により、情意によりて、信仰が存在する様に思ふと云ふは、これ何たる迷妄の見解であるか。

勿論吾々は、世間の所謂信仰は知らない、外教の所謂信仰は知らない、が親鸞聖人御一流の信仰、他方絶對の信仰は、全然吾々の意志、感情、理性を超絶して、それ以上に根據を以て居る、吾々の精



神とは何等の關係もなく、相似もなき、不可稱不可思議の濶天地に、  
根底を以て居る。

成程 人間の智識も、現象界には相應の働きを以て居る、感情や  
意志も、人間社會には相應の價值を以て居る。哲學上の智識は、奈  
何にも幽玄で精密で、倫理に對する意志は、奈何にも健全で莊嚴で、  
藝術に對する感情、極言すれば宗教上の感情と云ふものも、まことに  
高尚で、微妙で、哲學や藝術は宇宙の花、學者や美術家は人類の  
最高位であらう。されど他力の信仰に對しては、藝術も哲學も、寸  
毫の價值なく、學者も美術家も無智無趣の凡俗と同一である。

否信仰に對して見れば、人間の智識は大なるラビリンスである、  
迷路である。道を求むる勇士が煩悶懊惱、進むに光りなく、退くに  
道なく、胸を打て浩嘆し、絶望し、昏倒するのは、實に此智識の爲

である、感情は信仰に對する憎むべき妖魔である、彼は時に陽春三  
月の光景を示し、妙齡楚々たる處女となり、三百由旬の化城を現じ、  
屢求道者を救いて、疑城胎宮の中に安せしむる。意志は信仰に對す  
る恐るべきヤチである、押せば押す程反對に撥ねかへり、意志彌強  
くして信仰彌遠ざかるものである。人間界に踳踏すれば、智識は確  
實で、感情は優美で、意志は莊嚴のものであるが、信仰に對すれば  
こは不思議！總て皆障礙である、反對である、矛盾である。現象界  
に彷徨すれば、智者は高く、徳者は尊く、藝術家は敬ふべきもので  
あるが、救済に對すれば、愚者、悪人、凡俗と同一である、寸毫の  
差異なきものである。

まことに信仰に對しては、愚者は幸福なり、悪人は幸福なり、凡俗  
は幸福なるかな、父は此眞理を常に學者善人に隠して、愚惡の徒に示



し、智者藝術家に隠して、無趣無智のものに顯はし給へばなり。

彼等は智なきが故に長きラピリンスを要せず、彼等は無趣味の故に妖魔も惑はすこと少く、無力の故にバチを押す事を用ひず。憎むべきは智識のラピリンスかな、彼何の權利ありてか、しかく道者を苦しむるのであるか、見よ彼は紙一枚程の厚さも持たずして、而も千里萬里の長程を有するが如く現じ、何等の實質も非ずして、千丈の絶壁として顯はるゝかを。忌むべきは宗教的感情、道德なるかな、彼何等の尊嚴ありてか、しかく求道者の進達を害するのであるか、見よ彼は根のなき花ではないか、水上の繪ではないか、而も彼等は不遜にも天使の如く、菩薩の如く、悠然として吾等に望み、儼乎として吾等に望まんとは。

智あるものは智を捨てよ、徳あるものは徳を捨てよ、信仰的理性

とか、宗教的感情とか云ふ美しき悪魔に魅せられつゝあるものは、先其理性感情を捨てよ、否爾の智慧は今迷妄である、汝の感情は實は悪魔である、汝の道德は眞に罪禍である、汝の信仰は全く空虚である。眞の信仰は善人―自己の悪を知らぬ人の前には顯はれず、救済は智者―自己の愚を知らぬ人の前には顯はれず、父は信者―宗教的感情に惑溺する人には顯はれず、汝の信仰、智慧、道德の一切を捨て、初めて永遠の救済に入るのである、確乎たる安立に入り得るのである。

かく云はゞ、汝は悪人と知るを以て救済の豫件と思はん、智を捨つる事を信仰の準備と思はん、信仰を抛つ事を安立の必要と考へん、迷へるものよ、汝は悪人と思はんと努めん、無智たらんと求めん、信仰を抛たんとあせらん。惑へるものよ、若汝の力によりて、寸毫



だも汝の心變らば、見よ太陽は西より出づるを、汝の分別に依りて微塵だも汝の心移らば、見よ頑石は水に浮ぶを。此一つ―自ら自分を動かし能はざる此一つでも、汝の無力を知るべきでないが、汝の無智を知るべきでないか、汝の罪惡を見るべきでないか。

惱めるものよ、今汝は迷倒の凡夫と宣告されん、汝は之を奈何ともする事が出来ない、而も汝は實に迷倒の凡夫でないか。痛ましきものよ、今汝は煩惱具足の悪人と断定されん、汝は之を奈何ともする事が出来ぬ。而も汝は實に煩惱具足の悪人ではないか。憐れむべきものよ、死に次ぎて永劫の苦患汝に襲來すことためられん、汝は之を奈何ともする事が出来ぬ。而も汝は實に此運命にあるではないか。弱きものよ、汝永遠の苦患を脱せんには、先汝の迷倒を去れ、罪惡を離れよと教へられん、汝は寸毫も迷倒を去る事が出来ぬ、罪惡

を離れる事が出来ぬ、而も汝は實に此無理なる教誡の下にあるのではないか。

惱めるもの、痛ましきもの、憐れむべく、力なきものは、實に今日の吾等なるかな。迷倒、罪惡、無力にして、將に永劫の苦難に入らざるべからざるものは、實に今日の吾等なるかな。噫吾等天に訴ふれど天答へず、地に叫べども地響かず、野の百合は萎はれ、庭の雀は養はるゝに、人の子のみは永へに、飽くべからざる飢渴、酬ゆべからざる要求、填むべからざる欲陷に悩まされんとは。

時に聲あり告げて曰はく

恐るゝものよ聞け、惱めるものよきけ、苦しむもの、悶ゆる者、智なきもの、徳なきもの、一切大衆皆共に、此驚くべく、喜ぶべく、謝すべく、踊るべき、大音宣布の消息を聞け。『法藏菩薩因位の時、



智なき吾等、徳なき吾等、惱める吾等、恐るゝ吾等を哀愍し、五劫に思惟して超世の大願を起し、別異の弘願を建て給へり、彼は汝等の爲に善を積み徳を集めたり、汝等の爲に悪を除き力を成就したまへり、彼は遂に十劫の昔、諸の衆生をして、功徳を成就せしめたまへり、彼は今阿彌陀如來となりたまへり、汝等救済の證權として、南無阿彌陀佛の名號を成就せり』と。

喜ぶべきは吾等なるかな、吾等は力なきによりて、如來は吾等の爲に力を成就したまへり。吾等は徳なきが故に、如來は吾等の爲に大善大徳を成就したまへり。吾等は永劫の苦難を受けざるべからざるが故に、如來は吾等の爲に惡道の道を塞ぎたまへり。吾人は此世界を好まざるが故に、如來は吾等の爲に清淨大安の世界を成就したり。吾等は信仰を起す事能はざるが爲に、如來は他力の大信を廻向

したまへり。吾等の一切、宇宙の一切は、皆空虚荒廢の爲に、如來は吾等が眞實豐饒の南無阿彌陀佛を成就したまへり。

吾等には信仰なし、宗教なし、高尚なる思索もなく、神秘なる感情もなく、努むべき意志もない、吾等は常に空虚なり、罪惡なり、必墮無間である。而も吾に動かすべからざる本願あり、如來あり、名號あり、吾は又何をか求め何をか探さん、又何の不足ありてか諸行諸善に心を止むべきや。

奇なるは我心かな、怪しきは我心かな。吾は嘗て、哲學、藝術、宗教、理性、意志、感情を以て、明了確實一點の疑ふべからざるものと爲し、法藏菩薩、本願、念佛を以て、神秘朦朧不實のものとなした、而も今我心は、嘗て此眞實明了動かすべからずとした一切を以て、全く相對有限、有體に云へば、迷妄、空虚、不實とし、唯法



殿、本願、名號を以て、唯一絶対無限、寄りても寄りつけず、近い  
ても近くべからざる、眞實圓滿不動の大事實と信するに至りた。  
噫、親鸞聖人の信仰、他力絶対の信仰は、簡單である。明了であ  
る。直截である。唯本願を信じ名號を稱ふる外に別の仔細のないの  
である。本願は如來の御元にある眞實で、念佛は吾等の上にある眞  
實である。救済は如來の御元にある眞實で、南無阿彌陀佛の稱名は、  
空虚の宇宙荒涼たる人生の沙漠中に顯はれたる唯一無二の大眞實で  
ある。本願の外に眞實なし、念佛の外に實質なし、吾等にあるもの  
は感謝も空である、分別も空である、追想も空である、信仰も空で  
ある、言語も空である、報恩も空である。唯本願念佛のみ修養であ  
る。信仰である、分別である、正語である、感謝である、報恩である、  
唯一の眞實である、未通りたる眞理である。

他力絶対の信仰は、理性的信仰でない、不思議的信仰である。感  
情的信仰でなくして事實的信仰である。意志的信仰でなくて、自然  
の信は願より生ずる信仰である。一言に云へば、主觀的事實でなく  
て客觀的事實の信仰である。



## 一八 信仰の本質と其鍛錬

信仰とは過境的實在の私に對する救濟なり。本願成就の如來の私に對する満足大悲なり。天人合一佛凡融合の致一的狀態なり。人間の智情意一切の拋棄的終局なり。吾人本來の面目を發見せる狀態なり。現在一念の常位に安住する決心なり。無理を去りて、自然に復歸せる狀態なり。有限の自我を捨て、無限の自我に入り、永劫の死を離れて、恒久の生命に入るの契機なり。宇宙自然の大道に一致せる狀態なり。宇宙をして結果あらしめたる狀態なり。法界に意義と旨趣とを附與したる端倚あり。世界の一切に對する勝利の凱歌なり。絶對的謙遜と、自尊との融合せる一念なり。無限小と無限大との渾

一せる一心なり。宇宙の一切に胡座感謝する覺悟なり。宇宙の一切を誘導開發せんとする決心なり。往き易くして人なく、捷徑にして難信の至極なり。これ金剛不壞の淨信にして、圓頓圓滿頓極頓促、不可稱不可說不可思議、一乘大智願海、廻向利益他の大信なり。

既に人間の智情意を離れ、人間の心識を超ゆ。されば吾等、若智によりて求めんか、推量計度を以て進まんか、既に人間の智なり、顛倒の智なり、隨て此に依て進む信仰は、畢竟信仰の自殺を以て終らざるべからず。若意志を以て進まんか、道德法律によりて救はれんとするの愚は云はずもあれ、吾等自己の努力を以て、自己の欲求を以て過境的實在と融じ、絶對の大悲に攝取せられんとす、これ無望の要求なり、顛倒の要求なり、人間意志の制約として、彼は畢竟自縛の運命を受けざるべからず。感情に於て亦然り。



信仰は既に人間の智情意を離れ、永遠に過境的なり、恒久に超絶的なり。若智情意に寫象せるもの、設定せるもの、影現せるものは、既に過境的の本質を離れ、超絶的の實質を離れ、全く似ても似つかざるもの。若然らば人智は信仰に寸毫も要せざるか、人意は救済に何等の旨趣なきか。然り彼は寸毫も關係なく、寸毫も旨趣なしと雖、而も過境的實在の救済に觸れ、超絶的の信仰に入らんと欲すれば、又雄大なる發心と、深邃なる思索を凝さざるべからず。此智顛倒にして此智なからざるべからず。此意不要にして此意なからざるべからず。これ易往にして無人、捷徑にして難信。求道の勇士、こゝ肝膽を砕くべきの所。

且や信仰の本質たる、極端なる不寛容不兩立にして、彼斃るゝか、吾死すか、彼と吾とは永劫に相立ち、相容るべからざるもの。彼と

は何ぞや、眞信仰以外の一切なり。信仰は自己を光りとして、他一切を打破せずんば止まず。彼は其尊嚴を保たんが爲に、他一切を棄却し盡さずんば止まず。若信仰にして一步も他一切に譲らんか、彼は既に其本位を捨てたるなり。若救済にして、寸毫も他一切に待つ事あらんか、彼は既に其帝冠を失ひたるものなり。他一切とは人間の一切なり、人間的宇宙の一切なり。隨て人、若眞信仰に達せんと欲せば、彼は自己一切の智慧分別に勝たざるべからず。此爲に彼は科學に打勝たざるべからず。哲學に打勝たざるべからず。世界一切の宗教に打勝たざるべからず。切言すれば彼は彼の就て學びつゝある宗教其物にも打勝たざるべからず。彼は言説の宗教、認識内省の宗教、文字の宗教、苟も人間の思想に顯はれ、認識に顯はれ、言語に顯はれ、文字に顯はれたる宗教は、一切之を棄却し去らざるべからず。



らず。彼は信仰の淳朴を保たんが爲に、飽まで自己の意志を捨てざるべからず。此爲に彼は、世の法律に勝たざるべからず。道徳に勝たざるべからず。習慣に勝たざるべからず。教條に勝たざるべからず。切言すれば彼は自己所奉の信條其者、苟も人類の意志規定は、其奈何なる形なるを問はず、悉之に打勝たざるべからず。彼は救済を如實ならしめんが爲めには、彼は其感情に打勝たざるべからず。此爲に彼は、人間を根本として生ずる感情、即人間的感情は、審美的感情と云はず、道徳的情操と云はず、宗教的感情、神秘的情緒と云はず、苟も人間精神中に浮びたる模様は、其奈何なる形式たるを問はず、之を根底より破却せざるべからず。彼は根本より自我を滅却せざるべからず。此爲に彼は、彼に關聯せる全世界を滅却せざるべからず。宇宙を征服せざるべからず。彼

は自我の世界、暗黒世界、意義と旨趣なき一切の世界を、一心の中に征服せざるべからず。彼は彼の一切に打勝ち宇宙の一切に打勝たざるべからず。若信仰にして一毫も、人間の智情意を餘さんか、これ不淳の信仰なり、僞信仰なり、假信仰なり、暫有的信仰なり、否信仰と名くべきものに非ず。若信仰にして、人間世界の哲學、倫理、藝術、宗教の一毫も許容せんか、これ淺薄の信仰なり、迷妄の信仰なり、一時的信仰なり、否信仰を爰ふ人智の妖怪たるに過ぎざるあり。若然らば、信仰には、科學、哲學、藝術、宗教を要せざるか。然り眞信仰の前には、彼等は何等の價值を有せず、何等の實在を有せず。而も彼等は信仰に進むに當り、缺くべからざる要因なり、道程なり。彼等は何等の價值なくして、而も大なる價值を有し、必要缺くべからざるものにして、而も常に何等の必要を有せざるもの。こ



、求道の勇士沈思一番せざるべからざる所。

それ然り、信仰は人間の智情意を超越せるものにして、而も飽きで人間の智情意を要し、科學哲學宗教と何等の關係なきものにして、而も大に之に籍らざるべからざるもの。科學哲學宗教に憑るべきを聞いて、之を尋ねて進まんか、彼は畢竟信仰の迷路に自殺を計らざるべからず。人間の智情意に依るべしと聞いて、之を尋ねて進まんか、彼は遂に信仰のラビリンスに入り、自繩自縛の悲境に陥らざるべからず。ラビリンスと知りつゝ、人は永久に此道を辿り、迷路と知りつゝ、人は一般に此坂を攀ぢざるべからず。されど憂る勿れ、本願は既に成功せられたり、宇宙は既に光に満たされたり。吾等若人智の終局に達し、宗教の結末に至り、名師の開發を得んか、機縁の純熟に逢はんか、過境的實在の信仰は、其本位を動せずして直に

吾に現し、超絶的救済の手は、其超絶性を失はずして、直に吾に融するに至るべし。

信仰の而立實に此の如く遠し。而も其信仰たる自己以外は一切に對する征伏、一切に對する不寛容にして、宇宙の一切に意義を書きかへ、自己の一切に根本的改革を惹起するもの、而立尙易しとするも、不惑の境域に進む事、又眞に容易からず。まして耳順、知命、任運無功用の境界をや。

勿論信仰其物は極めて簡潔明確なり、一言すれば如來の救済なり、攝取なり、六字の唱名なり、人間の智情意を離れたる六字の唱名なり。唯それ南無阿彌陀佛のみ。言のみ。字のみ。聲のみ。彼は六字の聲にて事足れり、彼は何等の添加物を要せず。まして彼は而立と不立とを要せず、惑と不惑とを要せず。彼は考察を要せず、努力を



要せず、聲自身にして絶對なり、六字自身にして圓滿なり。否聲も要せず、文字も要せず、過境的實在其物にして絶對なり、超絶的大悲其まゝにして圓滿なり。而も、惑と不惑とを要せざる信仰は、同時に又惑を去りて、不惑に至らんとし、不明を去りて明に赴かんとし、無理を去りて自然に進まんとし、宇宙の一切を一々征服して其光榮を萬物に輝かさんと欲す。彼は安住的にして、絶えず前進し。彼は圓滿にして、絶えず要求す。彼は進歩を拂ひつゝ常に進歩の道程に立ち、向上を無意義視しつゝ、而も向上せざれば止まず。而して此向上、此進歩や、所謂信後の工夫、悟後の鍛錬は、信念の確立發起と共に、又吾等の血と骨とを捨てざるべからざる所。露の哲人トルストフ氏云、宗教と信仰とは人生の隠れたる目的なりと。實に人生は此爲に價值あり此ありて初て意義と旨趣とあり。此目的の爲

に生涯を捧げ此鍛錬の爲一身を犠牲にす。これ眞の本務に非ずや



## 一九 絶對的謙讓と他力信仰

信仰は絶對的謙遜なり。究竟的抑損なり。罪惡深重の自覺なり。自力無功の實驗なり。人智迷妄の悟達なり。地獄一定の確信なり。若信仰にして寸毫も自己に善根を認め力を認めんか、これ未だ究極せざる信仰なり。寸毫も人智に執着し、寸毫も地獄一定を疑はんか、これ尙徹底せざる安立のみ。

否、吾等は實際罪惡深重のものなり。自力無功の徒なり。虚妄顛倒の輩なり。地獄一定の罪人なり。而も吾等、決して之を知る能はず。又覺る能はず。これ我等が、地獄一定の罪人、虚妄顛倒の輩、自力無功の徒、罪惡深重の爲なるのみ。

吾等寸毫も自覺に達し、此悟了に至れる事、全く絶對の如來により、無縁の大悲心に醒まされたるによるものなれども、萬一吾等自ら此覺醒に達し、此悟了に至り、自己本然の真相、自己永遠の運命を、罪惡深重、自力無功、虚妄顛倒、地獄一定と自覺して、而も此に對する如來、此に對する大悲者なかりしならんか、これ由々しき大事なり。至惨なる大事なり。宇宙的慘狀、法界的大悲劇なり。

知らず、吾等果して何時の時、此迷妄の生を引けるか、至惨なる運命を招きたるか。免まれ吾等事實として、罪惡、無力、顛倒、墮獄の生を受け。而も又、罪惡、無力、顛倒、墮獄の爲に、永久に、罪惡、無力、顛倒、墮獄の生なるを忘れ。尺蠖の循環するが如く、蠶繭の自縛するが如く、つぶさに法界を廻り、永へに生死の巷に迷ふ。噫何時の時にか自覺の運命に達し、解脱の樂境に生れんや。



かゝる迷妄顛倒の吾等、無智無力の吾等、漸く其迷妄を覺わ其無力を感ず。事既に容易ならず。これ既に唯事ならず、此一事を以ても、我親戀聖人の所説、如來成道の因果又まことに信すべからずや。吾等迷妄なり、故に自己の迷妄を知らず。吾等無智なり、故に自己の無智を知らず。吾等重悪なり、故に自己の重悪を知らず。吾等墮獄者なり、故に自己の墮獄を知らず。此矛盾せる運命、絶望的運命これ實に吾等が真相にして、因位に於ける如來が、洞觀し、於哀し、悲憐したまへる、吾等が真相なり。

久遠實成の如來、此を見此を悲しみ、憐念同情にたへずして、自ら願を起し誓を立て、骨を削り、血を絞り、願力を磨き、淨慧を修し、徳を積み、罪を贖ひ、遂に法界の群生、迷妄の含靈の爲に、自ら正覺を成し、救済成就の布告を發表したまへり。

吾等此如來の正覺によりて、初めて自己の迷妄を知り、無力を知り、罪惡を知り、悲惨の運命を自覺せり。吾等一たび此自覺に達せる時、噫、吾の淺劣、汚穢、迷妄、顛倒、全く言語の盡すべきにあらず。世極惡最下の人と云ふ、吾之を拒むの權なきなり。虛假偽善の徒と云ふ、吾之を否むの權なきなり。嫉妬猜忌の女流と云ひ、不潔汚穢の劣夫と云ひ、迷妄顛倒の至愚者と云ひ、世の至醜至惡至鄙至陋の文字を以て吾に迫まるも、吾一言の辯護する餘地なし。否、曾に世の至醜至惡の文字のみならず、阿毘の大城にあり、惡魔の宮殿にある、一切の呪咀、冷笑、毒罵の聲を以て迫まるも、吾決して之を避くるの資格なきもの。而も見よ我如來は實に此至醜至惡至卑至陋の我が爲に、其檀林の寶座を捨て、婢僕——否婢僕すら耐ゆべからざる婢僕となり、奴隸——否奴隸すら忍ぶ能はざる奴隸となり、



かゝる迷妄顛倒の吾等、無智無力の吾等、漸く其迷妄を覺む其無力を感ず。事既に容易ならず。これ既に唯事ならず、此一事を以ても、我親鬱聖人の所説、如來成道の因果又まことに信すべからずや。

吾等迷妄なり、故に自己の迷妄を知らず。吾等無智なり、故に自己の無智を知らず。吾等重惡なり、故に自己の重惡を知らず。吾等墮獄者なり、故に自己の墮獄を知らず。此矛盾せる運命、絶望的運命これ實に吾等が真相にして、因位に於ける如來が、洞觀し、泔哀し、悲憐したまへる、吾等が真相なり。

久遠實成の如來、此を見此を悲しみ、憐念同情にたへずして、自ら願を起し誓を立て、骨を削り、血を絞り、願力を磨き、淨慧を修し、徳を積み、罪を贖ひ、遂に法界の群生、迷妄の含靈の爲に、自ら正覺を成し、救済成就の布告を發表したまへり。

吾等此如來の正覺によりて、初めて自己の迷妄を知り、無力を知り、罪惡を知り、悲惨の運命を自覺せり。吾等一たび此自覺に達せる時、噫、吾の淺劣、汚穢、迷妄、顛倒、全く言語の盡すべきにあらず。世極惡最下の人と云ふ、吾之を拒むの權なきなり。虛假偽善の徒と云ふ、吾之を否むの權なきなり。嫉妬猜忌の女流と云ひ、不潔汚穢の劣夫と云ひ、迷妄顛倒の至愚者と云ひ、世の至醜至惡至鄙至陋の文字を以て吾に迫まるも、吾一言の辯護する餘地なし。否、管に世の至醜至惡の文字のみならず、阿毘の大城にあり、惡魔の宮殿にある、一切の呪咀、冷笑、毒罵の聲を以て迫まるも、吾決して之を避くるの資格なきもの。而も見よ我如來は實に此至醜至惡至卑至陋の我が爲に、其檀林の寶座を捨て、婢僕——否婢僕すら耐ゆべからざる婢僕となり、奴隸——否奴隸すら忍ぶ能はざる奴隸となり、



何等の理由なく、條件なく遂に吾を救済したまへるに非ずや。攝取したまへるに非ずや。

吾の價値は救済によりて寸毫も高まれるに非ず、吾の眞相は攝取によりて寸毫も消まれるに非ず、吾何處に行きて誇る所あらん、吾何人に對して驕る所あらん。

如來すら我が爲に婢僕となりたまへり。大覺すら我が爲に奴隸となりたまへり。吾奈何で迷へる同胞の爲に婢僕たり奴隸たらざらんや。吾佛を誤解せり、而も佛之に耐へたまへり。吾奈何で世の誤解を怒るべけんや。吾佛を迫害せり、而も佛之を忍びたまへり、吾奈何で世の迫害を忍ばざらん。吾佛の身血を流せり、佛而も之を許したまへり。吾奈何で之を宥さざらんや。吾は佛の永久の敵なり、而も佛吾を無縁に救ひたまへり、吾又奈何で之を導かざらんや。吾の

苦痛、困難、迫害、攻撃、難は即ち難、苦は即ち苦なれども、之を如來の受けたまへる困難、苦痛、迫害、攻撃に比べてはそれ幾干ぞや。吾の苦痛は五十年なり、佛の苦痛は永劫なりしなり。吾の困難は些少なり、佛の困難は實に數ふべからざりしなり。而も吾佛に依りて永遠の沈淪を救はれ、剩へ永劫の大樂を與へらる。吾又何をか憂へ、何をか悲しまん。

之に於てか終日世の爲に働くも、寸毫の自負なく。生涯法界の爲に勤むるも寸毫の我覺なく。常に世の婢僕となり、法界の奴隸を以て甘んずるを得べし。

吾我親鸞聖人及我蓮如上人の上に此絶對的謙讓の最大最高の典型を見、又此兩聖人の上に他力信仰の現實的活動を見るなり。



## 二〇 活動力の源泉と他力信仰

吾等は永久地獄を免るべからず。長劫阿毘の大城に叫ばざるべからず。知らざれば則ち止む。一度此運命を自覺して、我等奈何で心安かるべき。吾等は嘗て、此自覺を迷妄として排斥せり。來世に對する恐怖心を、心的病症として目を瞑れり。而も此自覺は、漸然吾に排すべからざるものとなり、此恐怖は目を瞑りて、忘れ去るべからざるものとありぬ。明了確實、一點の否を入るべからざる死の運命をさへ、何かによりて忘れつゝあらんとせる我心も、遂に、死の運命と共に來るべく、而も、死よりも尙百倍、千倍、百千億倍恐るべき運命の、吾等に迫り來りつゝあるを疑ふ能はざるべくなりぬ。

空虚浮動、何等の實質なき世の衰敗にすら、尙且眉を開閉する我が心は、此恐るべき運命の自覺によりて、戰慄せり。疑立せり。驚愕せり。吾等は、かゝる恐るべき運命にある吾等の爲に、救済の門を開ける彌陀の本願、他力の信仰に向ひぬ。彌陀の本願は云ふ、汝等唯吾を信せよ、然らば汝等救はるべしと。他力信仰は教ゆ、自力を捨て、唯佛をたのめ、然らば汝等救はるべしと。

吾等は毒蛇に追はるゝ旅人の如く、一意此本願信仰によりて救はれんとせり。吾等は自力を捨てんとせり。佛をたのまんとせり。深く信せんとせり。而もこれ自力なり。疑惑なり。不信仰なりと。若し自力あり、疑惑あり、不信仰ならんか、永劫の苦難眼下にあり。而も自力を捨て、疑惑を去り、佛を信せんとする事、これ自力なり、疑惑なり、不信仰なりと云ふ。禍なるかな吾等、進んで道を得ず、



退いて又道を失す。前門虎を防いで後門狼を招く。まことにこれ恐怖——否、恐怖以上の恐怖、憂悶——否、憂悶以上の憂悶。我が目既に涙涸れたり。我が胸既に憂悶絶へたり。吾は最早覺悟せり。吾は最早斷念せり。恐るべき運命を眼下にながめつゝ、甘んじて此運命に赴かざるべからず。彌陀の本願他力の信仰に逢ひながら、吾は空しく其救済を餘所に見ざるべからず。吾は最早狙上の魚と静に目を閉ぢたり。運命のコックが、將に下さんとする鋭き一刺をわびれず待ち望めり。一念、吾は彌陀の本願を知れり。他力の信仰を獲たり。噫如來の本願は、此絶望せる我が爲なりしなり。他力信仰は此狙上の魚の爲なりしなりと。

まことに吾等今日まで、身に何等の力なくして、如來の本願を計らひ、何等の智慧なくして、他力信仰を椰楡し。無力絶望の運命に

ありながら、有力有望のものと誤認し。至高至絶の如來に對して、至下至賤の自心を運び。天地と隔たる信仰に向ふて、手も届けば足も届くと妄想せり。非ず、吾等は無智無力、我が爲の本願にすら、自ら救はるゝの力なく、我が爲の信仰すら、自ら得るの智慧なく、屠所の羊の歩みを以て、見る、最後の叫喚に陥らざるべからざるもの、噫これ眞の吾からずや。我が眞價值ならずや。如來の目を以て見たる吾ならずや。これ無始以來不變の吾ならずや。一切人類共通の吾ならずや。而も此吾こそ、法藏因位の所觀、五劫思惟の對機、永劫修行の正目的、十劫正覺の對手、本願名號、功德、淨刹を成就せる唯一目的たる吾たらずや。

吾既に五劫思惟の正目的たり。十劫正覺の唯一對機たり。無智無力、我が爲の如來すら信するの力なく、我が爲の信仰すら、自ら證



るに由なき吾。我が爲の一切を後ろに見て、空しく最後の悲鳴に陥らざるべからざる吾こそ、これ如来發願の正目的なり。さらば十劫正覺の宣言は、これ實に我が救済成立の大宣言なり。南無阿彌陀佛の名號は、これ我が往生成就の證權なり。幸なるかな吾や。吾は無智無力にして、常に地獄の直上に横はる。而も吾、既に如来によりて救済せられんとは。これをしも無縁の大悲と云はずんば、將又何をか云はん。これをしも他力信仰と云はずんば、將又何をか云はん。

身を見れば罪惡煩惱、直下これ地獄に非ずや。而も吾れ無智にして、毫も之を避くるの工夫なく、吾れ無力にして、我が爲の如来すら動かす能はず。吾こそは實に無力中の無力者、絶望中の絶望者、唯泣いて無間の火中に墮在すべきものならずや。而も吾、何等の力

なく、何等の工夫なく、唯全く如来によりて救はれたり。他力によりて上げられたり。無縁に救はれ、無條件に攝められたり。而も噫我が無縁に救はれたるは、これ如来永劫修行の爲ならずや。蕩兒の安穩は、これ父母多年辛勞の賜ならずや。吾れ我が運命を思ふて身毛逆立。吾れ我が運命を善くせんとして希望杜絶。吾れ自ら如来を動かさんとして又絶望。而も吾れ此時如来の力によりて永劫の大樂を見出す。吾永劫の大樂を見出しては、直に如来永劫の辛酸を思ひ。如来永劫の辛酸を思ふては、吾感謝云ふべからず。噫此感謝、永劫忘るべからざる感謝、粉骨報ゆべからざる感謝、充溢抑ゆべからざる感謝、暗陲詮顯すべからざる感謝、而も此感謝は唯僅に五十年の中に顯はすべく限られたるに非ずや。而も此感謝、微妙無力不淨汚穢の我感謝は、絶對清淨、無漏圓滿の如来に捧げまつるべく、あ



まりに恐れ多からずや。否、奈何で捧げまつるべきものならんや。充溢抑ゆべからざる我感謝は、未來——死後——なる障壁に妨げられて、五十年の生涯中に弾ねかへされたり。暗墮云ふべからざる感謝の激流は、如來廣大の巨岩に堰かれて、人類の社會に逆流せられたり。保羅云はく、吾れは歡喜に惱み、感謝に煩ふ。旋轉廻周記字と狂ふ我が感謝は、僅五十年の生涯と、人類の社會とに限られたり。身を粉にすどや、愚なり矣。骨を砕くどや、愚なり矣。思へ如來なき吾れは、永劫身を粉にすべからざるに非ずや。思へ本願なき吾は、無間に骨を砕かざるべからざるに非ずや。而も吾等何等の功なくて、永劫の悲鳴を免れ、剩へ恒久の大樂を期する事、唯、一に如來永劫の難行によるに非ずや。法藏因位の本誓によるに非ずや。感謝胸に滿つ豈獨り親鸞聖人のみならんや。渴仰肝に銘す、豈特に蓮如上人のみならんや。

のみならんや。

空曠の沙漠、空曠の沙漠、これ吾等の世界ならずや。混沌の暗、混沌の間、これ吾等の社會ならずや。沙漠中、茲に一大清泉あり、滾々掬んで盡さず、滔々天に沖して止まず、これ如來清淨の大心より出づる、感謝活動の、大清泉なり。混沌の闇夜茲に、一大燈臺あり、滾々燃へて盡さず、輝々照らして止まず、これ如來智慧の大光より出づる感謝鑽仰の大燈臺なり。闇此燈臺を入るゝにはあまりに狭まらぬ、沙漠此泉みを攝むるにはあまりに淺し。誤まるな、此清泉世界の中にあり、燈臺社會の中にありと。否、清泉は世界より遙に深くして、否、世界反て清泉の中にあり。燈臺は、社會より遙に廣くして、社會反て光りの中にあり。まことや此心廣大にして法界に周偏し、恒久に彌淪すと。法界に周偏する大心凝りて我胸に宿り、



恒久に彌漚する恒心、集まりて我心に住む。以て芥子を輕しとせず、又須彌を動かすべし。

汝、永久活動の源泉を求むるとな。さらば須く眞摯なれ、謙讓なれ、明敏なれ。邪見傲慢は、信樂受持する所以にあらず。絶對安立の所以に非ず。眞摯なれ、眞摯なれ、絶對に眞摯なれ。謙讓せよ、謙讓せよ。絶對に謙讓せよ。明敏なれ、明敏なれ、絶對に明敏なれ。其所に眞の汝を知り、其所に眞の如來を信せん、永久活動の源泉、不盡感謝の清泉、本誓なり焉、必汝の前に顯はれん。

## 二一 哲學倫理藝術と他力信仰

哲學倫理藝術は、眞善美の探求を目的とする吾人人類の智情意の所産なり。此等智情意の所産なる倫理藝術哲學は、現世以外の妙土を望み、如來廻向の信念に憑る、他力眞宗の信仰に對して、果して什麼の旨趣を有するか。

勿論人は各其立場に由り主伴輕重の見を異にす。道德家は道德其物を以て人生主要の大事と爲し此見地より藝術哲學に對し。藝術家は、藝術其物を以て絶對の價值あるものとし、此確信より倫理哲學を評し。哲學者は哲學最高の立地に座し、藝術倫理宗教に對して一定の旨趣を見出さずんば止まず。されば、吾等が自家信仰の満足の



爲に此等一切の事象に對して、一定の見解を下し一定の旨趣を探ぐる必しも不遜の事に非ず。吾等が茲に降す斷定こそ、眞に哲學藝術倫理の客觀的妥當性を有する最恰好なる位置なり。

今吾等茲に哲學倫理藝術と云ふ、されどこれ、それ／＼理性意志感情に配當するものにして、單に思惟に關する事項は、其倫理に關し藝術に關するにかゝはらず、共に之を哲學の範圍に攝し。唯美情の默觀及其所産と、道德の實踐意志の修養とを、それ／＼藝術倫理に配當するものなり。若然らば此定められたる意義に於ての此等三者は信仰の爲に果して甚麽の旨趣を有するか。

思ふに此等三者の信念に對する旨趣は、消極積極の兩面に分る。吾等今此兩種の旨趣を、理性の所産なる哲學、意志の所産なる倫理の上に、少しく解説を施さんと欲す。

第一、哲學は宇宙の真相を知り、人生の歸趣を究め以て人類の爲さるべからざる本務を決定せんと試むるもの。一言すれば彼の目的は、宇宙の眞理を覺觀するにあり。之に於てか東西兩洋人類の存する所、先神話あり、次ぎて哲學的考察起る。見よ過去二千有餘年の間、人類は奈何に此目的の爲に盡瘁したりしかを。世界は此目的に向ふて、奈何に偉大の頭腦を犠牲にしたましかを。而も此目的たる眞理は、果して既に闡明せられたるか、少くとも尙將來に於て闡明せらるべきか。

吾等は信ず、哲學は實に此目的に對して頗る多くの事を爲せり。又未來永遠人類の存する限り其目的を追究して止まざらん。而も吾等は、吾等理性の性質として、又過去哲學史の教訓として、到底永遠に其目的を達する能はざるを斷言せざるを得ず。見よ吾人の理性



は、常に同等の価値と理由とを有する、二個の相反對する結論を生ずるに非ずや。思へ哲學史は、奈何に矛盾せる幾多の反對思想を包含するかを。甲は物質一元を以て世界全局を説明せんとすれば、乙は心的一元を以て宇宙の根本原理と推獎す。一は宇宙を以て理性の假展とすれば、他は反對に意志の現化なりと云ひ。一は物心相關論を主張すれば、他は心身並行論を提出す。一は超絶神論を唱へ、他は内存的實體を提唱す。勿論此等幾多の撞着に對して、理性は之を融和せざるに非ず。而も此融和は畢竟唯より高度の反對を生ずる契機を造るのみ。ヘーゲルの研究法に於ける、撞着の本性及價值に對する所論は此點に就て尤も精密を極む。されど我等はヘーゲルの如く、單に此等の撞着を以て、長へに生ずる撞着を以て、發展の必然的制約として樂觀するにたねず。何となれば、これ永遠に眞々理撞

着なき眞理に到達するの不可能を宣言するものなればなり。非常なる自負と確信とを以て進める理性も茲に至りて反省なきを得ず。果然理性は自己能力に疑を狭めり、認識論の問題は止むあく提出せられたり。而もこれ夢中に於て夢を語ると一般、理性を疑ふて理性の本性起原範圍を定めんとするものも畢竟又其疑はれつゝある理性、撞着反對すべき理性なれば、其結論に於て、實在論、現象論の反對となり、經驗論唯理論の反對となり、毫も一定の見解に達せざるは眞に其所なり。

若夢中におきて最覺醒に近きものを求めれば、唯これ總ては夢なりとの自覺にして、眞に此自覺に達せる時、彼は忽然夢寐の境を脱し、覺醒の人となるを得べし。茲に至りて初めて撞着なき眞々理に到達するを得べし。哲學史上此に近き人、僅に二人、一は希臘の



ソクラテスにして、他は獨逸の幹圖なりとす。ソクラテスは云ふ、  
 Know myself 即汝自身の眞價を知れと。又曰く、吾一事の最も善く知れ  
 る事あり、そは吾何事をも知らざると云ふ事ありと。此確信と謙讓と  
 あり、之に於てか、神の殊寵を受け、デモンの聲を聞くにたゆ。幹  
 圖は云ふ、吾等の知る所は吾等経験の對象のみ、迷情の範疇に相應  
 せる世界のみ、物如の眞相、宇宙の本質の如きは、アンチノミーに  
 依りて成立する、理性の能く關する所に非ず。彼は同等の理由の價  
 値とを以て、之を肯定すると共に否定するものなり。此謂れなき理  
 性の肯定も眞ならず否定も偽なり。故に理性は肯定の權利も否定の  
 權利も有せずとし、斷乎たる自殺を理性に宣告して、以て眞個の復  
 活を促せり。何となれば夢は自ら夢を知るに非ずんば覺醒の時あら  
 ざるが如く、理性は理性を否定するに非ずんば眞理に入る能はざれ

*know myself*

ばなり。夢は唯夢と知りてのみ初めて夢を離れ、理性は唯自己を否  
 定して始めて、永遠の生命に入れはなり。ソクラテスの警句 Know  
 thyself を理論的に證明せる氏の純粹理性批判は畢竟これなり。氏の  
 實踐理性批判は、此理性を離れたる眞理を意志の欲求、眞我の渴仰、  
 本願の威力に一任すべき事をヒントするものにあらずや。即ポーロ  
 の望む所を疑はず、未見ざるところをまこととすると云ふ信仰に一  
 任すべき事を暗示するものに非らずや。幹圖の偉大なる所以はかく  
 認識論を以て形而上學の全體とし、理性の自殺を以て哲學の終局結  
 論とせる所なり。

哲學は其性質上眞理の探求は不可能なり、理性は唯理性を否定す  
 る爲にのみ存在するとせば、哲學は幹圖に至りて其極に達し、理性  
 は氏に依りて其天職を果せり。然らば哲學は既に世に存する價值な



しか、理性は遂に人類の用を爲さざるか。否事實は寧ろ反對にして、  
 幹圖以後、獨逸の思想界は、フヰヒテ、セエリング、ヘーゲル、シ  
 ヨオベンハワー、ハルトマン等の輩出を以て哲學史上、稀有の壯觀  
 を呈せしに非ずや。否未來幾萬年の末に至るも人類の宇宙に存する  
 限り、哲學理性は決して其生命を失はざるべし。何となれば、人は  
 奈何に理性の薄弱を知るも、なぐられて怒らざるを得ざる人類は、  
 自己運命と痛切の關係ある、宇宙人生の真相に就て何等かの解決を  
 得ずんば止まざらん。真理に對する眞智の渴欲は、餓鬼の飲食に對  
 すると一般、禁せんと欲して禁する能はず、止めんと欲して止むる  
 能はざる、至大至深の要求なればなり。思ふて茲に至れば、吾等は  
 唯茫然として其撞着せる我等の運命に就て、胸を打て浩嘆せずんば  
 非ず。

野の百合は装はれ、庭の雀は養はるゝに、人の子のみは永遠に、醫  
 せられざる傷、填められざる缺陷、報いられざる飢渴に攻められん  
 とは。

吾等は他力の信仰に依りて、初めて其傷を醫され、缺陷を填めら  
 れ、飢渴に報いられ、哲學及理性に對して、偉大なる旨趣を見出せ  
 り。即ち眞理に對する飽なきの要求は、當來佛果に於て菩提の與へ  
 らるゝを暗示するものにして、同時に佛果に對する還元的衝動なり。  
 往生淨土の不識的渴望なり。これ哲學理性の信仰に對する積極的旨  
 趣なり。其理性に依りて永遠に報いられず、哲學の到着點は畢竟哲  
 學の自殺に結歸する事は、これ信仰救済の第十八願をヒントするも  
 のにして、人は眞理の子なると共に、永へに眞理と絶縁せられたる  
 ものにして、唯他力攝取の本願に依らずんば、永遠に流轉を免るべ